

あとあと

# 痕跡

桑原裕子

## 登場人物

折出聖子  
被害者の母  
沖廣也  
加害者

黒沢元章  
目撃者  
清水英子  
聖子の義妹  
木俣寿和  
フリーカメラマン

沖みさを  
沖の妻

仁志田墨助  
メイの兄  
仁志田メイ  
竹夫の内縁の妻  
吉川瞬  
竹夫の事実上の息子

折出有樹  
韓国料理屋の店員  
山田花子  
韓国料理屋のホステス  
ラーラ  
韓国料理屋のホステス

有樹(子供時代)  
作業員1  
作業員2  
作業員3

吉川竹夫  
失踪者

## オープニング 元バーテンダー・黒沢竹章の証言

轟く雷鳴。激しくふりつける雨音。ごうごうと唸る風の音。あの嵐の夜の再現。不意に雨音が静まり、暗闇の中に黒沢元章（くろさわ・もとあき）の姿が浮かび上がる。バーテンダーの制服を着た黒沢の片目は白く濁っている。

黒沢はグラスを拭きながらどこかのカメラに向かって話し始めた。

黒沢

アーアー、アー。あの嵐の夜、人生を狂わされたというなら、私だってその一人です。今から10年前、2004年の8月3日のことは、これからも決して忘れることはないでしょうね。あれは妙な夜でした。でも今思えば、はじめからひどい夜でした。嵐が近づいているというのに店を開けてしまったことがそもそも間違いで、当然ながら開店して何時間たっても客は現れず、私はこのようにいかにもバーテンらしいそぶりでグラスを拭くほか、することがなかったのです。

唸る風、ガタガタと窓がきしむ音。

黒沢

店の明かりが不安定に明滅し、古いブラウン管のテレビ画面は波打って写るものもなく、カウンター横のガラス窓は今にも割れそうな勢いで軋んでいて、そういうときは大の大人だって怖いものです。とはいえ店を閉める決心もつかず、夜九時を回る頃だったか。窓の向こうを眺めていましたらね、通りの向こうにあの男が現れたんです。

遠くから歩いてくる一人の男の姿が、稲光で照らされる。

そのサラリーマン風の男、吉川竹夫（よしかわ・たけお／当時35）は、折れてひしゃげた傘をさし、嵐の中、ヨロヨロと風に揺られながら歩いている。

黒沢

その覇気のない男は、折れてまるで役に立たない傘をさして、びしょ濡れの体を引きずるように通り向こうの川沿いを歩いていました。その川、橋が架かっているのが見えるでしょう。あれ、アワヒ川って言うんですが、蛇行しているせいか、昔は暴風雨で洪水になることもしょっちゅうだったって話でね、そのときは増水して水が川の縁ぎりぎりまでせめて波打っていました。そんな川のそばを歩いていた男が、橋の真ん中で不意に立ち止まりましたね、川を眺めおろしているんです。やや、といやな予感がした直後にはもう、男は橋の欄干に立ちあがっていました。

竹夫は橋の欄干に立って川を見下ろしている。竹夫に向かって呼びかける黒沢。

黒沢

ねえ！なにやってんの！おい！！私は思わず店を飛び出していました。そりやそうでしょう、目の前で自殺なんてされたらたまりませんから。お

い！！そんなことしちやダメだよ！！私が呼びかけると、男はゆっくり私の方を振り返りました。そして次の瞬間、男はどうしたと思います？

竹夫は橋から降りるとゆっくり黒沢に近づいてきた。

竹夫 …まだやってる？

黒沢の向かいの椅子に座る竹夫。

黒沢 店に入ってきたんですよねえ、これには驚きました。ずぶ濡れの客なんか正直いやだったけど、この状況じゃ断れないじゃないですか。

竹夫 生。

黒沢 黙ってカウンターに座る男に、私も黙って、しかし動揺のあまり持っていたスコッチグラスに生ビールをついで渡しました。男はそれから一時間かけてビールを一杯だけ飲むと、嵐の中、普通に帰っていききましたよ。ええ、また同じことするんじゃないかと戸口の外で少しの間見張りましたけど、その様子はなかったし、正直に言えば自分の視界から消えたらその先のことは…ね？でまあ、嵐はいつこうに落ち着く気配もなく、私はいよいよ店を閉める決心をしたわけですが、ええ…ここまでは前置きです。すいません長くたって。ここからです、あの事件が起きたのは。

遠くから黄色い雨合羽を着た少年・折出有樹（おりで・ゆうき／当時9歳）がてくてくと歩いて来た。

黒沢 店に戻った直後、男が去ったのと入れ替わりに今度は小さい男の子が川沿いを歩いてきたんです、一人きりで…もちろん、嵐の中で大丈夫だろうか、こんな遅い時間になぜ一人なのかと考えなかったわけじゃありません。でも私もあんなことがあった後じゃないですか。一刻も早く店を閉めたくて、片付けをしようとカウンターに戻り…、

走り込んできた自動車が急ブレーキを踏み、直後にバーンと激しい衝撃音。少年らしき小さな影が黒沢の視界の向こうにゆっくりと舞う。

黒沢 ……次に窓の外を見たときは、子供が宙を舞っていました。そしてそのまま、その影はアワヒ川の向こうに消えていきました。私は体が固まって身動きがとれぬまま、カウンターの窓越しでそれを見ていました。やがて、また別の男がやってきて…、

サラリーマン風の男、沖廣也（おき・ひろや／当時28歳）が、濡れた道路に足を滑らせながら走り込んできた。半狂乱で辺りを見回している。

黒沢 あれはきつと、車を運転していた男だと思います、動揺した様子で何かを探すように川沿いを走り回っていました。もちろん、「自分が跳ねたもの」を探していたんだと思います。暗闇で男の顔がよく見え、私は窓に張り付きました。  
沖 ああ、ああああ、

頭を抱えてうずくまりながら辺りを見回す沖。そこへ激しい閃光が走り、沖は体をこわばらせて空を見上げた。

黒沢 …稲光で瞬間、辺りが明るくなり、男が顔を上げたので、私はこれ以上ないくらい目を見開きました。目撃者として、私が唯一できたことです。そしてそれが、私の片目が見た最後の景色です。

強い風が吹き込み窓ガラスが割れる音。

黒沢 ははじかれるように片目を押さえ、倒れこんだ。

黒沢 あああああ、

叫びながらのたうつ黒沢。その叫びを聞いた沖はハッと我に返り、来た方へ戻っていくと、車で走り去った。

片目を押さえたまま倒れている黒沢を、カメラを持った男がフレーム越しに捉えている。やがて黒沢は身を起こし、カメラマン・木俣寿和（きむら・としかず）に向かって再び話し始めた。

黒沢 あの嵐の夜、人生を狂わされたというなら、私だつてその一人です。割れた窓ガラスの破片は私の片目の視界を奪い、私が最後に見た男はどこかへ消え、川の向こうへと消えた少年もまた、見つかることはありませんでした。雨であふれかえり濁流するアワヒ川に落ちた少年の行く末は誰でも想像がつかしました。警察や、少年の遺族や、新聞社の人間たちが何度も私に話を聞きにきましたが、私にできることは少なく、当時〇歳の折出有樹（おりで・ゆうき）君が巻き込まれた、あの哀れなひき逃げ事件は、やがて川の水が引くように忘れられていきました……ですが、私の片目が白く濁ってもここに残り続けているように、この小さなバ―が今もまだこの場所にあるように、あのとときの痕跡はどこかに残っているに違いありません。

暗闇から三人の人物が歩いてくる。沖と、竹夫、そして少しやつれた表情の中年女性。

黒沢 少年を亡くした母親は、逃げていったあの男は、そういえば、あの日橋の

欄干に立っていた男は今ごろどうしているんだろう。あとあとまで私はあの夜のことを、(片目を押さえ)こんな風にぼんやりとした視界で思いかえしていくんでしょう。

木俣はカメラの視点を黒沢から外し、別の方向へ向けていく。

加害者、被害者、目撃者、そして失踪者の四人は交差し、互いに遠ざかっていく。

## タイトル「痕跡―あとあと」

### # 1 聖子

聖子の家。折出聖子(おりで・せいこ)と、その義妹、清水英子(おりで・えいこ)の二人が向き合って正座をしている。カメラを構えたまま聖子の横に座る木俣。英子はハンカチで顔を押さえながら、肩を揺らしている。

英子 よく聞き取れなかったんだけど。

聖子 半年。

英子 半年…？

聖子 うん。

英子 なにが…？

聖子 余命。

英子 余命が…？

聖子 半年。

英子 半年…？

聖子 余命…、

英子 ウツウツウツ、

聖子 英子さん、泣かないで。

英子 そんなの私、聞いてない。

聖子 ごめんね。

英子 どうして話してくれなかったの？私の仕事、知ってるでしょ？力になれたかもしれないのに。

聖子 いろいろ、ばたばたしてたから、

英子 いろいろって離婚のこと？もう一年も前じゃない、その頃から隠してたの？

聖子 そうじゃないけど、

英子 ひどいわよお義妹さん、兄さんがいなくなっちゃって私たち、家族でしょう？

聖子 私も気づかなかったのよ。

英子 最近わかったの？

聖子 うん。

英子 半年って？

聖子 うん。  
英子 それでさつきからずつといるこの人は誰？  
木俣 あ…。  
英子 お医者さん？  
聖子 この人はね、あの、  
英子 姉を助けてください。  
聖子 お医者さんじゃないの。  
英子 …恋人？  
聖子 まさか、  
英子 兄には話したの？このこと。  
聖子 まだ。  
英子 耐えられないわよ兄さん…有樹君亡くして、姉さんまで、  
聖子 そのことなんだけどね、  
英子 ごめん縁起でもないこといって。絶対諦めたりしない、  
聖子 それはいいんだけど、  
英子 うちの病院に入って、一番良いお医者さん紹介するから。旦那のついで  
聖子 コネというコネ使うから、  
英子 うん、それはうれしいけど英子さん、  
聖子 で結局この人は誰なの？  
英子 英子さん。聞いて。  
…。  
聖子 この人、カメラマンなの。  
木俣 木俣と言います。  
聖子 フリーのジャーナリストをされてて、調べてもらってるの…有樹のこと。  
英子 有樹のつて？  
聖子 あの夜のこと。

# 2 竹夫

竹夫の働くクリーニング工場。

墨助 竹夫さん、竹夫さん、  
制服の白エプロンを着た竹夫がリネンの入ったクリーニングカートを引いて歩いてるところへ、スーツ姿の仁志田墨助（にしだ・すみすけ）が、太った体を揺らして書類を片手にやってきた。

墨助 竹夫さん、今夜つきあつてよ。おごっちゃうよ。  
竹夫 なんで？  
墨助 水くさいな。

竹夫 水くさいよな。

墨助 え、

竹夫 やっぱカビてんじやねえかなあ二番のドラム、あれで洗うとどうも水の腐った臭いがむーっとくんだよ、

墨助 今夜今夜。焼き肉いこ。

竹夫 この前行った店？やだよ。

墨助 行きましようよ、

竹夫 高いだけでうまくもねえし、本格韓国料理ってあんな嘘だよ？やってるのあれ中国人だろ。

墨助 そうでしたけど、

竹夫 あれは料理屋騙ったオツパブだよ。

墨助 …。(かわいらしく肩をすくめる)

竹夫 ああ。

墨助 行きましよう。

竹夫 あんたの妹に怒られたくないよ。

墨助 お食事行つて何で怒られるの？びしつと言ってやりやいいよ、亭主のする

竹夫 ことに口出すなつて、

墨助 どの子が気に入ったの？

白エプロンを着た吉川瞬（よしかわ・しゅん）が空の籠を持ち、事務員の仁志田メイ（にしかだ・めい）と連れだつてやつて来た。メイは途中で別の作業場へ向かい、瞬は竹夫のカートに入ったシーツの臭いをかぎながら籠により分けていく。

墨助 ラーラ。

竹夫 え？

墨助 ラーラ。

竹夫 名前なのそれ。（瞬に）何？

瞬 二番の洗濯、やり直し。

竹夫 ほらな。

墨助 竹夫さん、

竹夫 やっぱりドラムカビてんだよ。

墨助 竹夫はん、

竹夫 はんなり呼ばれても。

墨助 竹夫はん行こうやい。（紙をひらひらさせる）

瞬 なんすかそれ？

墨助 ん？ホームページ。

竹夫 ホームページ？

墨助 うちのHPのデザイン。ねえつてばん。

竹夫 そんなの作るんだ。

墨助 前からあったよ。

竹夫 え？（紙を手を取ってみる）  
瞬 前は文字だけの地味なやつだったけど。新しくするんすよね。  
墨助 チラシも新しくしたんだもんね。瞬ちゃん焼肉行こうか。  
瞬 肉？  
墨助 お肉。  
竹夫 こいつはだめだよ。  
墨助&瞬 なんで？！  
竹夫 まだガキだろ。  
瞬 ガキは焼き肉行っちゃいけないの？  
竹夫 そういう意味じゃねえよ。  
墨助 瞬ちゃんだつてもう大人だよね？よし、二人で行こう。  
瞬 …。  
墨助 何その顔？  
竹夫 おい墨ちゃんこれ、  
瞬 怪しいところすか？  
墨助 本格韓国焼肉！社長命令だ。  
竹夫 おい、これなんだよ？  
墨助 だからホーム、  
竹夫 写真載ってるじゃん俺の。  
墨助 どこ？  
竹夫 これ。  
墨助 ああこれ？前からあったよ？  
竹夫 何で勝手に写真なんか載せんだよ。  
墨助 写真ったって作業風景でしょう？  
瞬 俺は？  
墨助 写ってないね。  
竹夫 ダメだよこれ。やめて。消しといて。  
墨助 こんなちっちゃいの、  
竹夫 消せ。

竹夫はカートを引いて歩いていく。

墨助 （瞬に）…こんなちっちゃいのにね？

瞬は肩をすくめて作業に戻っていく。「焼き肉」と繰り返しながら瞬を追いかける墨助。

### # 3 英子

再び聖子の家。

英子 お義妹さん、それは…、  
聖子 最後のチャンスだと思ってるの。

英子 お義妹さん、  
聖子 もう一度探したいの。

英子 気持ちにはわかるわよ。でも、  
聖子 できることは少ないけど、この人にも手伝ってもらって、

木俣 うまくすればテレビ放送してもらえるんです、そして新しい情報だつて  
また入ってくるかもしれないし。すでにこれまで調べたことをまとめて友

英子 人がやってる動画サイトで流したら結構反響があつて、  
木俣 あなたうちの姉を食い物にする気ですか、

英子 そんなつもりじゃないですよ、  
木俣 この人はね、私の姉ですよ。兄と別れたつて一生…有樹は私の甥っ子な  
んです。

木俣 もちろん理解してます。でも、  
英子 確かにうちの兄は最低な人間で不倫だのなんだのつてさんざんお義妹

木俣 さんを泣かせてきましたけどね、それだつてあの頃の苦しみを忘れたいが  
ため、あ、これもネタにしますか？このテレビで、

木俣 まだテレビじゃないですけど、  
英子 どうぞ撮りたければ撮ってください、ほらっ（無理矢理カメラを向けさ

聖子 せ）…この夫婦はさんざん悲しんできたんです。それを姉さんがこんな  
大変なときに今更ほじくり返して…余命半年の母親が行方不明の息  
子捜し？そんなお涙ちようだいのワイドショーネタ…、

聖子 …。  
英子 ごめん。

聖子 ううん。でもどうしても私、もう一度探したいの。  
英子 お義妹さん。聞きたくないだろうけど、聞いて。有樹君はね、有樹は

聖子 …、  
英子 もういないと思うのよ。この世には。  
聖子 私も考えた。だから、半年後に会えるならそれでいいかって思おうとし

英子 たの。でも、ダメなのよ。  
聖子 ウツウツウツ…。

英子 諦められないの。あの町からこんなに離れた場所で、ただその時がくるの  
を待つのは。

英子 …。  
聖子 だから、あそこへ戻つてもう一度だけ。それでダメなら、半年後を待つか  
ら。

英子 …どうするつもりなの？  
木俣 とりあえずしばらくの間、向こうに滞在するつもりです。滞在先の当て  
はあるんで、レンタカーを借りて、

英子 わかりました。そういうことね。  
木俣 はい？  
英子 (涙を勇ましく拭い) 行きますとも。  
木俣 え、  
英子 同行しましょう。  
木俣 あなたが？  
聖子 え、英子さん？  
英子 だつてそのつもりで私に話してくれたんでしょ？看護婦として私だつて姉さんの力になれるはず。  
聖子 いや、私はただ、あの人にこのこと伝えてもらおうと思つて、  
英子 ううん。兄さんの代わりに償わせてもらう。お義妹さんの気が済むまでつきあいます。  
聖子 英子さん。  
英子 いいですよ？  
木俣 それはあの…。  
英子 いつからですか？休暇の届け出さなくちや。息子は旦那の実家に預ければいいから、え、レンタカーの手配つてもう済んでます？

てきばきと動き始める英子。聖子と木俣は顔を見合わせ、ついて行く。

#### # 4

#### 沖

名古屋駅の新幹線乗り場。旅行用のカートを抱え、ぼんやりと立っている沖。そこへ妊娠中の大きな腹を抱えて、妻・沖みさを(おき・みさを)が紙袋をたくさん下げて走ってくる。

みさを ごめん待たせて。  
沖 …。  
みさを あなた、  
沖 (驚いて) お、おお、  
みさを 何その驚き方。暑い暑い暑い、(荷物を渡す)  
沖 なにやつてんだよ、もう電車来ちゃうぞ。  
みさを ごめん、お弁当選んでたら遅くなった。これこれ、地元岡崎カクキューの味噌カツ丼。  
沖 うまいの？  
みさを うん、実家戻るときはいつもこれつてなんか決めてんの。人気だからどこも売り切れで、売店三軒も回っちゃった。はい、あなたにも。  
沖 俺は乗らないよ。  
みさを わかつてるよ、家で食べて。今夜も徹夜でしょう？  
沖 ああ悪い。

みさを  
∞号車だつて。

カートを引いて歩く二人。

みさを  
何考えてたの？

沖  
え？

みさを  
さつき。えらいブーツとしてなすったから。

沖  
…こつち来たときのこと思い出してた。

みさを  
ああ、だからか。

沖  
え？

みさを  
どんよりした顔してたもん。

沖  
そうか？

みさを  
ブラック企業に勤めてるけど俺もう限界かもしれないって顔。

沖  
そんな饒舌な顔してた？

みさを  
思えばしんどかったよね、あの頃。毎日不眠不休で働かされたあげく、

名古屋なんか飛べされてさ。覚えてる？来たばかりの頃あなた、しょ

つちゆううなされて夜中に飛び起きてたの。起きてる間も挙動不審で

…ずつとビクビクしてる感じで。

沖  
…。

みさを  
ノイローゼだったんだよねきつと。

沖  
こつち来て治ったよ。

みさを  
肌に合ったのかな？なんだかんだ10年近く居着いちやっしたしね。あのま

ま東京にいたらあたしも引きずられて鬱になってたかも。

沖  
お前はないよ。

みさを  
うんないね。どうしたって毎日ご飯うまいしね。

沖  
実家戻ったらさらに食うな。

みさを  
いいんだよ今は。食わなきゃいけないときなんだから。

沖  
来たぞ。

東京行きの新幹線のアナウンスが聞こえる。みさをは新幹線のチケットを渡した。

みさを  
はい。

沖  
え？

みさを  
再来週、待ってるからね。

沖  
もう買ったの？

みさを  
お盆かぶってくるんだから、今のうちに買っておかないと。試験でばたば

たしてチケット買えなかったなんて言い訳されたくないもん。

沖  
ちゃんと買うよ。

みさを  
ほんとは地元、帰りたくないくせに。

沖  
…そんなことないよ。

みさを 大丈夫よ、あの頃とは違うから。

沖 どういう意味？

みさを ブラック会社にも勤めてないし？

沖 ああ。

みさを 帰ってきてね。絶対立ち会ってほしいから。

沖 ……わかった。

みさを うちの親も楽しみにしてるし、

沖 わかったっつもの。

みさを ここでもいいよ。そこ階段だから。

沖 気をつけてな。

みさを がんばれよ受験生！試験終わったらのんびりしよ。

沖 うん。

みさを 次会うときは会計士か。

沖 結果は「1月だつて」。

みさを わかってるよ、気分だろ、気分。（おなかを押さへ）あなた来るまでこ

れ、出ないようにしておくから。来なきゃ出ないんだからね！

沖 行くっつもの。

みさを は手を振ってホームを歩いて行った。

## # 5

### アガシ

墨助が竹夫と並んで歩いている。

竹夫 どこだっけ店。

墨助 あーあ。

竹夫 行くのやめる？

墨助 行くけどお、

その後ろに瞬が歩き、瞬の腕を振り回しながらメイが続く。  
一同は焼き肉屋へと向かっている。

メイ 焼つき肉焼つき肉、

瞬 韓国焼つき肉、

メイ 神戸牛の焼つき肉、

墨助 （鋭く）神戸牛じゃねえよ。

メイ じゃあどこの肉？

瞬 胃袋とか？

メイ ホルモン系？

墨助 （鋭く）その「ど」「じゃねえよ」。

メイ 焼つき肉焼つき肉、

瞬 韓国焼つき肉、

竹夫 メイ、言つとくけど浮かれるほどうまくねえよ。

メイ 肉なら何でも良いもんね？

瞬 うん。

墨助 あーあ。竹夫さんと二人で行きたかったなあ。

竹夫 一人で行くって選択はないの？

墨助 だつて俺一人で行つたらただの肉目当てみたいじゃないですか。

竹夫 自分への偏見だよ。

メイ あんた今日はいっぱい食べな。

瞬 うん。

墨助 お前が言うなよ。

メイ だつて今日は前祝いでしょ？

墨助 なんの？客いっぱいだったからお前、帰れな。

メイ え？4人で一席でしょ普通。

墨助 墨助たちは「ガールズ焼き肉アガシ」の店内に入った。

賑やかな音楽、「いらつしやいませー」というホステスたちの黄色い声。

ベストに蝶タイの男、折出有樹（おりで・ゆうき）が躍り出るように墨助の前にやつてきた。

有樹 （歌うように）極上のおもてなしと高級な肉に心も体もマシッソヨ、本

格韓国焼肉アガシですよこそー。

メイ …もう一度言つて。

有樹 （歌うように）極上のおもてなしと高級な肉に心も体もマシッソヨ、本  
格韓国焼肉アガシですよこそー。

メイ もう一度。

有樹 （歌うように）極上のおもてなしと（面倒になり）何名ですか？

墨助 四人。

有樹 ご指命ありますか？

墨助 （コソコソ）

有樹 コソコソしなくて結構ですよ、こちらへどうぞー。

有樹に案内されて席に着く四人。早速二人のホステス、ラーラと山田花子（やまだ・はなこ）がやつてくる。花子はミニのチャイナドレス、ラーラは安手のチマチヨゴリで、胸元には明らかにボールのような詰め物をしている。

ラーラ （片言で）ラーラですコンバンハ。

花子 山田花子です。

竹夫 全然統一感ないね。

花子 みんな本名でやってるんで。  
墨助 (手を振り)ラーラちゃん。  
ラーラ (手を振り)アア、マルい。  
墨助 (うれしげに)形状の記憶だ。  
メイ ラーラちゃんはなんかアレだね、その、すごいね。  
ラーラ (胸をつかみ)全部本物だよー、  
メイ あ、なんだか聞かれ慣れてる感じだ。  
ラーラ 全部本物だよー、  
墨助 本物だよね。  
竹夫 こういう店だよ、良いの？  
メイ 肉が食べられれば良い。  
花子 お飲み物何にします？  
瞬 酒飲んで良い？  
竹夫 安いのにしるよ。  
メイ やったね。

メニューを持って有樹が戻ってくる。

有樹 はいメニューこちらになります、当店ご来店はじめですか？  
墨助 僕らは二回目。  
メイ (竹夫をたたき)二回目？  
竹夫 知らずに入ったの。  
有樹 (流れるように早口で)え、当店メニューざつとご説明しますとおすすめのコースが「イートDEミート」「キッスDEミート」「霜降りタッチDEミート」の三種類」、単品はこちらからお選びいただけます。  
墨助 僕はタッチDE…、  
メイ 瞬ちゃん何にする？単品でジャンジャン頼んじやいな。  
瞬 うん、  
花子 そちらのお二人は、カップルですか？  
メイ ええ、そう見えますう？  
有樹 見える見える、  
ラーラ お似合いな感じ。  
メイ ミエルー、  
有樹 なーんちやつて息子でーす。  
メイ エー見えなーい、  
ラーラ ミエルミエルー、  
メイ もうすぐ息子の誕生日なんで、今日はうちのお兄ちゃんがごちそうしてくるつて。  
有樹 あー優しいー、お兄さん太っ腹ー！  
竹夫 太っ腹ー！

ラーラ

墨助

太イ腹ー！  
いやあ、

メイ

なんとたつてうちの兄社長なんですよ。

花子

えーすごーい、

有樹

かっこいいーお兄さんかっこいいー。

ラーラ

シヤチョー！

墨助

(さつとチラシを配り)クリーニングは我が社にお任せください。

有樹

わーチラシもかっこいいー。

墨助

まだ古いやつなんだけど、

有樹

渋みがあるー。

竹夫

くばんなよそれ。

墨助

今度新しいの出来るから、また持ってきます。

有樹

もうもう、どばつと持ってきてきちやつてください、店に置かせてもらうんで。

墨助

じゃあ今日は社長に甘えちゃおうか？

瞬

うん、

有樹

甘えちゃいな甘えちゃいなもううーんと甘えちゃいな！

# 6

瞬

時間経過。腹一杯で動けない竹夫とメイ、ラーラに付き添われて会計している墨助。

有樹

お会計 6万 7200 円になります。

墨助

えつ。

有樹

6万 7200 円。

墨助

…(少し考えるが)えつ。

有樹

お支払いはカードで？

ラーラ

ゴチソウサマ。

竹夫

あーごちそうさん、

メイ

兄ちゃんあんた男だよ。瞬、母ちゃんたち先出てるよ。

竹夫とメイは重そうに立ち上がり、会計している墨助の肩をたたいて店を出て行く。瞬はまだ花子と話している。

瞬

ほんとに本名？

花子

ん？

瞬

山田花子。

花子

おかしい？

瞬

なんか似合わない。

花子

そう？私は気に入ってるんだけど。

瞬

嘘の名前でしょ？

花子 ほんとに24歳？

瞬 …。

花子 いいの、困った顔しなくても。あなたは24歳、私は山田花子、ラーラの  
おっばいは本物。自分にとって必要なことが真実でしょ。

瞬 そつか。

有樹 僕は二十歳。

花子 それは嘘。

有樹 ほんとだよ？ラーラ、片っぽのおっばいが下がってる。

ラーラ お、(直す)

瞬 吉川瞬。

花子 ん？

瞬 俺の名前…。

花子 しゅん君か。今が旬の旬？

瞬 え？

花子 漢字。

瞬 ああ…、

花子 にんべんの俊？

瞬 ああ…、

花子 一瞬の瞬？

瞬 それ！

花子 ああ！

瞬 似合ってる？

花子 うん、そう思う。

瞬 (微笑む)…。

有樹 はいではこちらカードの控えになります、またご来店くださいカムサムニ  
ダ。

墨助 ラーラちゃん、電話するね、

ラーラ (墨助に勢いよく口づけをする)

墨助 (口づけしたまま抱きしめる)

有樹 (追い出す)カムサムニダー。

墨助はラーラを抱き上げたまま店を出て行く。瞬も立ち上がった。

花子 またね。

瞬 また来ます。

花子 ほんと？

有樹 お兄さん来るならまた社長連れてきてね。

花子 無理しないで。

瞬 (クリーニングのチラシを渡し)あ、うちに来ても良いよ？

花子 私が？

瞬 うん、いつもいるから。きて。

花子 (笑って) 考えとく。

メイ (外から) 瞬、なにしてんの。

瞬 じゃあ、

有樹 カムサムニダー。

瞬は帰って行った。

有樹 (笑って) クリーニング屋にデート？

花子 行かないよ。

有樹 (時計を見て) だいぶ粘ったなあお客。

瞬が出て行ったのと入れ違いにラーラが戻ってくる。おっばいが二つとも激しく下がっている。

有樹 ラーラ、ラーラ！

ラーラ お。(胸を直す)

花子 店閉めていい？有樹くん。

有樹 うん。

## #7 被害者の母・折出聖子の証言

聖子が一人椅子に座り、どこかにあるカメラへ向かって、静かに話し出した。

聖子 アワヒ川が流れるあの町を出てから10年、いろんなところで生活しました。岩手、鳥取、福岡、シアトル：最後が京都。銀行員の夫にとって転職はつきものですが、その通知が来るのはいつだって唐突で、知らせが来て三日後にはもう別の場所で生活していることもあったくらいです。

雨音。遠雷が聞こえる。

聖子 あの嵐の夜も。私たちは翌日に岩手への引越しを控え、荷物の整理をしていました。朝から始めた片付けが夜になっても終わらず、雨でまと

わりつく湿気に苛立ちが募り、有樹が部屋に戻ると私と夫はリビングで口論になりました。理解しているつもりでも、自分の生活が自分の与り知らぬところで変化させられることに疲れていたんだと思いますし、既に当時から夫婦の関係は問題があったんだと思います…とにかく、あの子は聞いたんでしょうね、積み重なる段ボールのなかで私たちが罵り合っているのを。なぜあの時、おびえる有樹に気づけなかったのか…。夜23時過ぎ、あの子の部屋に行くと、詰め終わった段ボールがあいて

黄色の雨合羽が抜き取られ、空っぽの布団だけが、まだあの子の形で盛り上がったまま残っていました。

黄色い雨合羽を着た10歳の有樹が歩いている。

聖子

そこからはあの子の痕跡をたどった私の想像でしかありません。川沿いの道を進んだ先にお山公園という公園があつて、その小さなトンネルを有樹はアニメの真似でタイムトンネルと呼んでいました。あそこに行こうとしたのか：公園の先にいつもよくしてくれるご近所のおばあちゃんがいるから、お別れ前に会いに行つたのか、川の反対側にあるお友達の家に向かったのか、それともただ：当てもなくさまよっていたのか。私たちにわかるのは、有樹がどこに行こうとしたかではなく、なぜ出て行ったかということだけ。

聖子が振り返ると有樹は消え、かわりに空を舞う子供の影が映る。黒い雨具をまとつた大人たちがやつてきて、懐中電灯で暗闇を照らしながら少年を探している。

聖子

アワヒ川沿いで：ひき逃げのようなものを見たと通報があり、被害に遭つた子供が川に落ちたと聞きました。その子の特徴が有樹に似ていると言ふことで、台風の中、アワヒ川で夜を徹しての捜索が行われました。私たちは有樹がないことに気づくのが遅くなり、また目撃したというバーのご主人も台風の被害で怪我をされ通報が遅れたとのことでも、増水して流れの速いこの川に落ちたのなら、今頃かなり遠くまで流されていてもおかしくないと警察の方に説明されました。でも私にはそれが有樹だとは思えません。どこか別の子じゃないかと…、

捜査員

おい、

捜査員の一人が何かを掴んで現れた。捜査員たちが懐中電灯を向けると、そこには泥にまみれた黄色の雨合羽。

聖子

：翌日もその翌日も捜索は続きましたが、川から有樹が見つかることはなく、雨で犯人の痕跡もぬぐい去られ、やがて打ち切られました。

捜査員たちが一人、また一人と懐中電灯を消し、去って行く。

聖子

その日、少し離れた病院に有樹と同じ年頃の親子連れが来たという話や、全く別の場所で似た子供を見たという目撃情報がいくつかよせられたものの、事故の経緯から見ても川に流された説が有力で、夫は転勤をひと月遅らせたものの、その頃は既に、有樹がこの世にいないと思つているようでした。私は諦めきれず、一人でこの町に残りましたが、

募る悲しみと反比例に周囲の関心は薄れていき、取り残された想いで家に引きこもるようになって、それから半年後、この町を離れました。もつとできることがあったんじゃないか、あとあとになって思えば、悔いごとばかりです。

最後の一人の捜査員が歩き去る。かわりにカメラを持った木俣が聖子をとらえる。

聖子

アワヒ川が流れるあの町を出てから一〇年、いろんなところで生活し、今は、また同じ場所に戻ってきました。既に死亡認定がされている子供です。私は癌を患って残る時間もわずかです。放っておいてもあの世で会えるのかもしれませんが。でも：戻らずにはいられないんです。

# 8

仮住まい

六畳一間の狭い部屋で呆然と立つ木俣、聖子、せんべい布団を抱えた英子。その横に布団を抱えた家主・黒沢。ここはあのバーの二階である。

英子

…ここで暮らすの？

木俣

一時の仮住まいですから。

英子

この部屋に三人？

黒沢

すいません狭くて。でもどうぞ、遠慮なくゆつくりしてください。私も長いこと物置程度にしか使ってたんで、少しほこりっぽいんですけど。

英子

今までのホテルじゃだめなの？

木俣

あんなところ泊まり続けてたら、すぐに金が底をつきますよ。

英子

私、出しても良いわ。

聖子

ここがいのよ。

黒沢

冷蔵庫やなんかは下のバーのを兼用してください。十二時閉店なんで、夜は少しうるさいかもしれませんが、何せ客も入らないんで、そんなに心配することもないかと。周りはお存じの通り、ひと気も少ないですね。

英子

あれ、虫じゃない？何の虫？

木俣

(確かめるが)大丈夫、死んでます。

英子

何が大丈夫なのよ、

黒沢

風呂はないんで、近所の銭湯に行ってもらうしかないんですが。あれだったらうちの自転車使ってもらっても。(鍵を渡す)

木俣

ありがたい、しばらくはレンタカーもあるから。

黒沢

ああそうね。

聖子

すいません黒沢さん、ご面倒かけて。

黒沢

いいえ、私にできることなんてこんなことしかありませんから。ずっと申し

訳ないと思ってたんです。あの時私がこんな怪我してなければ、もっと早く通報できたのにと……私にできることがあれば、何でもおっしやってください。

ありがとうございます。

早速ですけど、虫をいいですか？

（英子をたしなめつつ）ここを拠点にしていること、これから配るビラに載せても良いかな？もし近所で情報を持つてる人がいたら立ち寄れるようにしたくて。

かまいませんよ。

今、専用のホームページも作つてるところで、そこにも。

そうね。ついでにバー黒沢つてロゴ入れてもらっても。メニューも少し……、ぐるなびじゃないから。

ああ。

この窓、開けても良いですか？

どうぞ。

そうよ、空気悪いからお義妹さん、風に当たつて。

英子が窓を開け、聖子は窓の外を眺めた。

黒沢　それで今のところどうなんですか、進みというか。

木俣　当時の警察に聞き込んだりしてるけど、まだ手がかりらしきものは。

黒沢　木俣ちゃんの撮ってるドキュメント、あれ見てもらえれば良いんですけどね。私もよく撮れてるし。

木俣　まあ、始まったばかりだから。

黒沢　じゃあまあ、ほかに足りないものがあれば言ってください。

英子　布団が。

黒沢　ん。

英子　一組足りないんですが。

黒沢　これしかないんですよ、

英子　うそでしょ、

黒沢　すいません。

英子　二組しかないのにどうやって寝るの？お義妹さん病気なのに……（木俣を睨む）、

木俣　え……（ため息）車で寝ますよ。

英子　（満足）すいません。

黒沢　じゃそういうことで私、店に戻りますから。あ、良かったら下に飲みに来てください。

木俣　それはいいなあ、

黒沢　安くしますよ。

黒沢は布団を敷き終え、部屋を出て行った。

英子　　しつかしまあ…、明日は一番にアレね。

木俣　　ビラまき？

英子　　掃除よ。この掃除。お義妹さん、苦しくない？

聖子　　本当に真っ暗なのね。

英子　　え？

聖子　　改めて見ると、このあたり。街灯もなくて…川の向こうが全然見えな  
い。

木俣　　よくあの人もこんなとこに店出しましたよね。

英子　　土地が安いのよ。

聖子　　嵐ならなおのこと暗かったのよね、きつと。

木俣　　十年前と変わらないうか、このへんの景色は。

聖子　　どうだろう、たくさん歩き回ったのに、覚えることは断片的で。

英子　　辛くて覚えていられなかったのよ、そういうものよ。

聖子は窓を閉め、部屋を出て行く。

英子　　どこ行くの？

聖子　　ちよつと下に。(去る)

英子　　お手洗い？…飲みに行ったわけじゃないわよね。

木俣　　飲まないでしょう。

英子　　お義妹さんも強いわね。私なら、事故現場のすぐそばで寝泊まりする

なんてとてもできない。

木俣　　それだけ覚悟してるってことじゃないですか。

英子　　…でも、むしろ元気になった気がする。

木俣　　ええ。やるべきことがあるからですよね。

英子　　ずっとこうしたかったのよね…きつと。

黒沢が戻ってきた。

黒沢　　あの。

英子　　お布団ありました？

黒沢　　いえ。お義妹さん、出て行かれましたけど、大丈夫ですかね？

木俣　　えっ、

黒沢　　ちよつと歩いてくるって。

木俣　　今から？

英子　　お義妹さんたらこんな時間に、

木俣と英子は降りていく。黒沢も後に続き。

黒沢

止めるべきでした？

# 9

メイ

竹夫のアパート。竹夫が布団に寝そべり、メイはその横で竹夫の足を膝に乗せ、足の爪を切っている。隣室で、瞬が楽しみに電話する声。

瞬

え？ そうなの。ははは、こないだ言ってた映画？

メイ

山田花子？

竹夫

ん？

メイ

電話。

竹夫

んー、そうじゃねえか。

メイ

だめだね携帯渡すと、とたんに色気づいて。

竹夫

お前がやったんだろ？ いって、肉切るな。

メイ

だつてなきや不便じゃない？ ネットも使えない。パカパカのやつだけど。

瞬

(笑い声)

メイ

：花子のやつ。返してもらおうかな。

竹夫

二十歳にもなりや女くらいできるよ。

メイ

まだ十九です。ねえ、どうすんの？ あの子の誕生日。

竹夫

もうやったろ？

メイ

え、来月でしょ？

竹夫

そう。は、忘れてんのかと思った。

メイ

あの時は肉食べたかったからああいっただけ。なにあげるの？

竹夫

なにも。

メイ

だめよ、今年くらいちゃんとあげないと。今までだつてろくにあげたこと

竹夫

ないでしょう？

メイ

ゲーム機買ってやったろ？

竹夫

ゲームつて？ DSの古いやつ？ あんなの何年前よ。しかもうちの忘年会の

竹夫

ビンゴで当たったやつじゃん。今年はさ、旅行でもしない？

メイ

そんな金ねえよ。

竹夫

三万くらいあれば近場の温泉とか行けるって。

メイ

今更家族旅行なんていいよ。

竹夫

私はね、もう考えてるんだ。何だと思う？

メイ

携帯じゃないの？

瞬

アレはお古だから。もっと良いもの。

竹夫

(笑い声)

瞬

おい、長電話すんなよ。電話代かかるから。

メイ

(声が聞こえないよう小さくなる)

もーっと全然良いもの、

竹夫 何？

メイ まだ教えない。

竹夫 はあ？いつてえ、お前さつきから皮切ってるよ。

メイ 楽しみにしてて、ねつと。

竹夫 いてえっ！

メイ はい、おしまい。

瞬 （顔を出し）大丈夫？

メイは爪を切り終えると竹夫をうっちゃり、爪を片付けにいった。痛そうに指先をなでる竹夫。

## #10 ビラまき

木俣 お願いします。お願いします。

街頭で、聖子、木俣、英子の三人がビラまきをしている。受け取って関心を示す人には話しかけ、誰かがビラを投げ捨てれば拾ってまた配る。

聖子 行方不明の息子を探しています、よろしくお願いします。

聖子は汗をふきつつも積極的に声をあげて配っていく。英子も嫌々ながら手伝い、ヒールでむくんだ足をなでながら、聖子の後をついて行く。買い物袋を下げ、みさをが通りかかった。

木俣 お願いします。

木俣が差し出したビラを受け取ろうとしたとき、ほかの通行人がそのチラシを持って行った。木俣は興味を持ったらしい通行人に声をかけ、ついて歩いて行った。電話が鳴り、みさをはエコバッグから携帯を取り出す。

みさを もしもし？うん、大丈夫。夕飯の買い物してたところ。それでどうだった？うまかった？試験。もしもし？

別の場所。名古屋にいる沖が電話をしている。

沖 うん。

みさを え？

沖 うまくいった…と、思う。

みさを ほんと？

沖 たぶん。手応えあった。

みさを やったじゃん。

沖 (高揚しつつ息をつき) たぶん、たぶんだけど。

みさを 一日十六時間勉強した甲斐があったねえ、

沖 あーちよっと力抜けた。

みさを 頑張ったもんね、良かったね、ほんとに良かったね、(涙を拭う)

沖 泣いてんの？

みさを 泣いてねえよ。

沖 まだ受かったわけじゃないから。

みさを うん、でもひとまず、お疲れ様。

沖 …ありがとう、支えてくれて。

みさを …(照れて)おい真っ昼間からなんだ？

沖 や、普通のこといっただけだろ。行くからね。

みさを はー。(鼻を拭いて息をつき)ん？

沖 そっち。明日。

みさを 明日？まだ早いよ？

沖 良いよ、様子見たいから。

みさを …うん、じゃあ来て。

沖 うん。

二人はそれぞれ歩き出す。

みさを あ、来るときいろいろ買ってきて。

沖 ういろう？

みさを 柚のやつ。うちのお父さんが食べたいんだって。

明るい声で歩いて行く二人。

## #11 ラーラの結婚

開店前のアガシ。有樹、ラーラ、花子が開店準備をしている。有樹はメモをとりながらどこかに電話をかけ、その横でラーラが両手に持ったボールをもてあそびながら、興奮してピョンピョンと跳びはね、有樹の電話に耳をそば立てている。

有樹 はい…はいはい。来週の、

ラーラ 来週！？

有樹 (ラーラをいなして)はい、八月三日…、

ラーラ (ピョンピョン)

有樹 …谷口さん。

ラーラ 谷口！！

花子 (たしなめ)ラーラ。

ラーラ  
来週の谷口、来週の谷口、（嬉しさのあまり花子を抱きしめ）我也結婚《私も結婚するのよ》。  
花子  
∴。（ラーラの頭を撫でる）

瞬が店に入ってきた。

花子  
あ。

花子を見つけると瞬はうれしげに手を上げて近づき、クリーニングした制服を渡す。

花子  
もうできたの？

瞬  
うん。（ラーラに会釈）

ラーラ  
（ピースして、嬉しさのあまり瞬にボールを投げる）

花子  
ありがとう、早かったね。今財布、

瞬  
あ、いいよ。

花子  
払うよ。

瞬  
仕事終わった後にやったから。

花子  
ありがとう。ラーラもチョコゴリ洗ったら？汗臭いよ。

ラーラ  
うーん。（脇のにおいを嗅ぐが）ううん。

花子  
鼻馬鹿になってるんじゃないの？

ラーラ  
（瞬に脇を嗅がせて追い回す）

花子  
（笑って）やめなよ、

有樹  
（花子たちを横目で見つ）∴はい、わかりました、それじゃ失礼します。

ラーラ  
来週、谷口？

有樹  
うん、

ラーラ  
（有樹に抱きつく）

有樹  
あのさ。ねえ。

瞬  
あ、はい。

有樹  
開店前に来るのやめてくんないかな。金払ってくれるつつうなら別だけどさ、一応うちもこれで商売してるから。

瞬  
すいません。

花子  
クリーニング届けてくれたの。

有樹  
服一着で同伴なんかさせるなよ。用が済んだらもう帰って∴社長ー！

墨助  
ごめんくださいーい、

チラシ束を抱えた墨助が店に顔を出した。有樹はとたんに営業用の笑みを浮かべ、ラーラは慌てて胸にボールを詰め込んだ。

墨助　　すいません開店前に。  
有樹　　なんだなんだ社長もご一緒だったんすねえ。それ先に言ってく  
さいよお、

墨助　　あれ、瞬？（鋭く）なんだお前。  
瞬　　あ。

有樹　　え、ご一緒じゃなかったんですか？まあいいや、せつかくならお二人で  
ーつと盛りあがってつちやつてくたさいよ。

墨助　　開店前に良かった？

有樹　　当たり前じゃないっすか。そういう懐の深い店ですから。

墨助　　あ、これ。新しいチラシ出来たから。（東で差し出す）

有樹　　わーえーすごい思った以上にたくさーん。（ちよつと迷惑）

墨助　　ごめんね、迷惑じゃない？

有樹　　ぜんぜん、古いチラシと一緒に並ばせてもらいまーす。

ラーラ　　社長ー！（抱きつきに来る）

墨助　　ラーラ！

ラーラ　　社長！（嬉しさのあまりチラシをティッシュのように投げる）

墨助　　あ、あ、あ、

花子、チラシを拾いながら見る。

花子　　あ、瞬君だ。

瞬　　ああ、よくわかったね。（チラシを覗き込む）

花子　　働いてる。

瞬　　父ちゃんが写真写るのやだっっていうから、代わりに。

花子　　かつこよく写ってるよ。

墨助　　なんかラーラちゃんハイテンションだね。

有樹　　（拾いながら）すいません、ちよつとこの子、今日浮かれてるんですよ。

墨助　　え、なにになに、なにかあったの？

有樹　　いやあ別に、全然たいしたことじゃないんすけど。

ラーラ　　結婚！

墨助　　え、

有樹　　あちよつと、

ラーラ　　結婚するの、来週、谷口と！

有樹　　ラーラ、そういう話はお客さんにしなくても。

墨助　　結婚。

ラーラ　　うん。

墨助　　誰が？

ラーラ　　ラーラ！

墨助　　（これは…？という表情で有樹を見る）

有樹　　いや…何でしょうね、ちよつとこいつ、妄想入ってるかもしれないっすね。

ラーラ

するよ?!

瞬

そうなの?

花子

ああ…、

瞬

おめでどう。

墨助

どんな、ひとなの?それは。

ラーラ

ん?

墨助

すてきな…人なの?

ラーラ

知ラネ。

墨助

知らねえってことないでしょ、結婚するのに、そんな喜んでるのに知らねえってことないよ。

有樹

いや…でも社長、ここだけの話ね、世の中にはほら、愛のない結婚って言うのもありますからね。

墨助

…。

有樹

なんて言うんですか。生きていくすべみたいなの…紙切れ一枚の…うん、(帰って行く)

有樹

あ、待つてくださいよ、社長、帰っちゃうんですか?社長!

## # 1 2

### 憂いの墨助

クリーニング工場。竹夫、瞬、メイほか、作業員たちが、忙しなく行き来して働いている。その間を墨助がとぼとぼと歩いている。通り過ぎる作業員たちは墨助の肩をたたいて励ます。

作業員 2

(肩をたたき)社長。

墨助

うん…。

作業員 1

(肩をたたき)元気出しなよ。

墨助

うん…。

作業員 3

(肩をたたき)女がすべてじゃないよ。

墨助

うん…。

メイ

(腹をたたき)デブ。

墨助

(ハッとして)誰だ、今デブって言ったの。

振り返るが、メイはカバーの掛かった本を熱心に読みながらどこかへ行ってしまった。

墨助

おいメイ、お前何読んでんだ、遊んでないで仕事しろっ、(ほかの作業員に)ダラダラ歩くな。(ほかの作業員に)そこ、雑なんだよアイロンが!

竹夫

(実演して見せ)もっとギュッと、ギュッとかけろよ。

墨助

(通りかかって)いつまでも人やシートに当たってんじゃないよ。

竹夫

竹夫さん、ぼかあ、

竹夫

むしろ見切りがついて良かったじゃない。貢ぎまくって会社の金使い込む

前で。

もう結構使っちゃったよ。

どうしてアレに貢ぐ気になるのかさっぱりわかんないよ。

竹夫さんにはわからないよ、うちの妹なんかを嫁にとるような人には。

嫁にとつてないけどね。

：あそつか。はは、ざまみろ。(ふと)なんで嫁にしてくれないの？

俺の話じゃないだろ？

ラーラちゃんあんなに喜んじゃってさ。どんな男と結婚するのかなあ。

：偽装だろ。

え？

永住権目当ての偽装結婚でしょっての。

ま、さ、か…。(愕然)

いやそんなに意外な話じゃないから。喜んできたのもこれで不法滞在じゃ

なくなるからだろ。

そうか…。(笑顔)竹夫さん。

え？や、だめだよあんたは偽装結婚なんかしたら。

偽装じゃないもん。

あんたにとつてはね。

竹夫はアイロンがけをしている瞬の横を通りかかった。そのまま通り過ぎようとするが、瞬を見て引き返し、ポケットから雑な手つきで三万円を取り出すと、瞬のアイロン台に投げた。

瞬 (アイロンを当てようとして)わ。え、なに？

竹夫 …誕生日。

瞬 え？

竹夫 なんか、使えば。

瞬 まだだよ？誕生日。

竹夫 ……いつだっていいだろ別に。

瞬 ありがとう。やった。

竹夫 それでどつか…出かけるか？

瞬 ううん、なんか買う。

竹夫 あ、そ、

瞬 母ちゃんが言ったたのこれか。

竹夫 え？

瞬 今年はずごいもんくれるって言ってたから。

竹夫 何やる気なんだろ。

瞬 わかんないけど、弟かと思ってた。

竹夫 は？

瞬 赤ちゃん。

竹夫　メイが言ったの？  
瞬　ううん、勘だけど。  
竹夫　それって…（しゃがんでいる墨助につまづき）邪魔だよ。  
墨助　おめでとう。  
竹夫　いやないでしょ。え、何でそう思ったの？  
瞬　や…なんか遅くまで調べ物したり、本読んだりしてて、ちらって中見たら  
母子手帳？とか書いてあったし。

仕事をしていたメイは瞬たちの視線を感じて振り向くとにっこりと笑う。

瞬　ずっとニヤニヤしてるし。

竹夫　…。

作業員 1　瞬、

瞬が呼ばれて振り向くと、入り口に花子が立っている。いつもの店の格好とは違い、普段着の様相。瞬が花子に手をふると、花子もふりかえす。

瞬　（三万円を掴み、竹夫に）これ、ありがとう。

花子の元へ向かう瞬を、ほかの従業員たちがヒューヒューとはやす。

瞬　うるせえよ。

墨助　…（立ち上がり）子供ですか。

竹夫　あんたまだいたの。

墨助　竹夫さんもいよいよ、結婚してやらなきや。

竹夫　…。

墨助は頷きながら去って行った。竹夫は瞬の方を振り返ると、作業へ戻っていく。

瞬　どうしたの。

花子　自分が呼んだんじゃん、うちに来いって。（クリーニングのチラシを見せる）

瞬　あ。

花子　でも、仕事だよね？

瞬　社長見てないから平気。いつもと違うね。

花子　いつもの方が良かった？

瞬　（首を振る）こっちがいい。

花子　ここで働いてるんだ。暑いねえ。

瞬　ずっとスチーム出してるから。

花子　ずっとやってるの？

瞬 うん、子供の頃から。  
花子 へえ…だから瞬君で、ちょっと他の子と違う感じがするんだね。  
瞬 え…何が違う？  
花子 しっかりしてるって意味だよ。褒めてるの。  
瞬 ああそっか。  
花子 うん、すごいよ。  
瞬 (微笑む)…。  
花子 ねえ。  
瞬 うん、  
花子 何でずつと三万円握ってるの？  
瞬 忘れてた。  
花子 (笑って)しまつときな。  
瞬 使う？  
花子 何で。ほしそうな顔した？  
瞬 あ、そうじゃなくて。もらったんだ、誕生日ので。  
花子 じゃあ大事なことに使いなよ。  
瞬 うん、だから…これでどっか行かない？誕生日…。  
花子 …(頷く)どこに行く？  
瞬 考えとく。  
花子 仕事してるとこ、見せて。  
瞬 うん。プレス機見に行く？  
花子 うん。

瞬と花子は作業場の奥へ向かっていった。

### # 13 入院

病院の待合室。ベンチに木俣と聖子が座り、熱心に話し合っている。  
聖子は病院の患者衣を着ている。

聖子 それで?!  
木俣 連絡をくれた人は、珍しい名字だから覚えてたつて。  
聖子 うん、  
木俣 事実確認したところ、実際に八王子にいるようなんです、  
聖子 ほんとに!?!  
木俣 勤務先は調べがついてるんで、とりあえず明日にでも…、

入り口から英子がすごい剣幕で走り込んできた。

英子 (焦燥)お義妹さんっ、

聖子　　ここよ、  
英子　　（安堵）お義妹さん…、  
聖子　　はあい、ここ座って。それでそれで？  
英子　　（憤怒）お義妹さんっ、  
聖子　　そんなバリエーションつけて呼ばなくてもここにいますよ。  
英子　　（憤怒&憐憫）お義妹さんつたらもう、心配したじゃないの！  
聖子　　ごめんなさい。  
英子　　急に倒れたなんて電話受けて、ネイルも途中のまま飛び出してきちやっ  
たんだから。  
聖子　　倒れたなんて大げさよ。ちよつと熱射病みたくなっただけ。  
英子　　え、  
木侯　　説明が足りなかったですか。  
英子　　足りないわよ足りなすぎるわよ！  
木侯　　すいません、でも説明してる途中で電話切っちゃうから。  
英子　　一大事だと思っじゃない！私タクシーで向かいながらずっと般若心経  
唱えてたんだから。で、どうなの具合は？  
聖子　　うん、いったん診察してもらつて。  
木侯　　ちよつと過労気味だとのこと、  
英子　　当然過労よ。あなたがあちこち連れ回すから。  
木侯　　あなたがネイルしてる間に手伝ってくれたら良いじゃないですか。  
英子　　ビラまきすぎてマニキュアがはげたの！  
木侯　　でまあ、これから点滴してもらつてこです。  
英子　　ふうん…（病院内を眺め直し）これからつてじゃ、なんでここにいのの？  
聖子　　それがね聖子ちゃん、  
英子　　（遮り）つていうか、こんなちっちゃなクリニックで大丈夫？近くに大学  
病院だつてあつたのに、  
聖子　　大きなとこ行くと入院しろつて言われちゃうから。  
英子　　だけど、こんなとこじゃ点滴くらいしかできることないじゃない。  
聖子　　シツ、ここの先生にはお世話になつてるの。  
英子　　そうなの？  
聖子　　アワヒ町に住んだ頃のかかりつけだったの。有樹だつて何度も診てもら  
つたのよ。あ、有樹といえ、ね、木侯さん。  
木侯　　はい。ついに情報が来たんです。  
英子　　え、  
聖子　　今さつき木侯さんに電話が来たの。  
木侯　　ビラを見た人からで、八王子に有樹君と同じ年頃で同姓同名の青年  
がいるつて、  
英子　　ほんと？  
聖子　　そうなの。  
木侯　　大人になつてるから背格好はわからないけど、顔は似てるかもしれないっ

て、

八王子ってこつから…、

一時間くらい。

でも同姓同名なんていくらでもいるでしょ？

折出って名字はそんなにいないんですよ。それにね、

(うきうき)そう、

その本人に昔の話を聞くと、なぜだかごまかして話しながらないそうなんです。

へえ、

ない話じゃないでしょ？そしてなんと！

有樹、腕に小さい痣があつたの覚えてる？生まれた頃からある、斑点みたいなのやつ。

うん！…ん？(自信ない)

忘れてんのかい。

それがあつたって言うのよ！

すごいじゃない！

でしょう！？(興奮のあまり咳き込む)

お義妹さん、

聖子は激しく咳き込んだ。立て直そうとするが、止まらず、つんのめるように屈んでゼイゼイと咳をはき出す。木俣と英子は背中を撫でる。

木俣

大丈夫ですか、

聖子

ごめん、(笑おうとするがまだ咳き込む)

英子

(鞆からペットボトルを取り出し)お水飲んで。とにかく休みましょう、

話はそれから。

木俣

すいません。先生呼んできます。

木俣は診察室の方へ向かっていった。

英子

今日は姉さん、ここに泊めてもらった方が良いわ。それで、部屋が開いて

たら二、三日いさせてもらおう。

でも、明日は八王子、

だめよ、まずは休まないと。

でも…、

大丈夫。二、三日くらいで、いなくなったりしないから。

…。

木俣

聖子さん、行きましょう、

木俣が医師を連れて戻ってきた。歩いてきたのは、白衣を着たみさをである。

みさを 大丈夫ですか。なかなか戻ってこないから。

聖子 すいません。

英子 先生、なにとぞ姉をよろしくお願いします、先生には昔からお世話になつてるようで、

みさを アア、私じゃなくて父です。

英子 ああ。

みさを 私は看護師です。たまたま実家に帰ってるから手伝ってるんですけど、

英子 こんなお腹じゃナース服は着れないんで。

みさを ああそうですか。ああ。

みさを いきましようか。

聖子 はい。

木俣 僕待ってます。

みさを、聖子、英子は診察室に向かう。

英子 先生。じゃなくて看護師さん、私も看護師なんですけどね、少し先生

みさを とお話し出来ますか、病状についてご説明したくて。

みさを わかりました。

聖子 お父様は相変わらずお元気そうで。

みさを ええもう、かくしゃくとしてます。

三人は去って行った。が、すぐに英子だけが戻ってきて木俣に駆け寄る。

木俣 え、

英子 八王子の、私が行くから。

木俣 はい？

英子 有樹に会いに。

木俣 本人が行きたいでしょ。

英子 確証もないのに連れてってもし違ったらどうするの？お義妹さんまた倒れて寝込んで、今度は起き上がってこないかも、

木俣 (気圧されて)わかりましたよ。だけど、

英子 もし本人だったらそれこそ連れて帰りや良いんだから。

木俣 わかるんですか？

英子 え？

木俣 あなたに。

英子 当たり前でしょう？甥っ子見分けられないわけじゃないじゃない！

# 14

有樹

アガシ。いつものメンバーが働いている。

花子&ラーラ いらつしやいませー。

木俣 あの人です。

英子 (確かめるように凝視するが)…。

木俣 忘れてんじゃないか!

英子 まだ来たばかりだから。

有樹 どうもどうもー、

有樹が英子と木俣の前に躍り出た。

有樹 (歌うように)極上のおもてなしと高級な肉に心も体もマシッソヨ、本格韓国焼肉アガシですよこそー。

英子 あ、あ、あの…、

木俣 あの、折出…有樹さんですか?

有樹 え、ああ…、

木俣 そうですよね?

有樹 …有樹君、ですか?

木俣 え、

有樹 今呼んできます。

英子 (木俣に)違うのよ。

有樹 (店の奥に呼びかけ)有樹君有樹君!(戻ってきて)はい当店の若きマス

ター有樹でーす!

木俣 …。

有樹 二名様で。ご指命ございますか?

木俣 あ、あなたを。

有樹 …(怪訝そうに)僕っすか?

木俣 もしお時間ありましたら…、

有樹 (ニッコリと)はい僕にご指名はいましたー!こちらの席どうぞ。

有樹に案内されてテーブルに着く二人。木俣は席に着きかけるが、後ろの席にいる黒沢に近づいて肩をたたく。

木俣 黒沢さん。黒沢さん。

黒沢 え?

ラーラを膝に乗せながら焼き肉を食べさせてもらっていた黒沢はアッと声を上げて立ち上がった。ラーラが黒沢の膝から滑り落ちる。

黒沢 (木俣たちの席に移り)や、どうもどうも、先に偵察しておきました。

木俣 視界ふさがってたでしょ。  
英子 え、この人がなに？  
木俣 や、彼も有樹君の目撃者なんで。  
黒沢 あなたが見分けられなかったときの保険に。  
英子 一度見ただけの人と並べないでよ。  
黒沢 いや僕もそう言ったんですけどね…どうしても確かめたかったです。は  
やりのガールズ焼肉。  
英子 関係ないわ？  
黒沢 で、どうですか？彼。  
英子 違う。  
木俣 そうですか。  
英子 あんなにチャラくない。  
木俣 キヤラで決めちゃだめでしょ。  
英子 子供の頃と顔が違う。  
黒沢 事故で怪我したら顔変わってるかも。私のように。  
英子 いや、そもそも私を覚えてるでしょ甥っ子なら。  
木俣 ああ。  
黒沢 会いたくなければごまかすかも。  
英子 どういう意味よ。  
木俣 だからおどけてるのかな？  
黒沢 ほんとに覚えてないんじゃない？記憶喪失とか。  
木俣 そんな。  
英子 …じゃあどうやって見分けるのよ？！  
木俣 あんたわかるって言ったでしょ。  
英子 うー…、  
木俣 あなたは？  
黒沢 僕はわかりません。  
木俣 何しに来たんだよ。  
黒沢 片目ないんで…。  
木俣 ずるいよそういうの。  
有樹 失礼いたしまーす。

有樹が戻ってくる。

有樹 当店メニューざっとご説明します。おすすめのコースが「イート DE ミー  
木俣 ト」「キッス DE ミート」「霜降りタッチ DE ミートの…、  
有樹 あの、有樹君。  
木俣 はい有樹でーす。  
有樹 有樹君はおいくつ？  
木俣 二十歳でーす。

木俣 このお店は長いの？  
有樹 だって、まだ若いんで。

木俣 出身は？

有樹 アレ？ご注文前にフリートークですか。

黒沢 じゃ生をみつつ…、

英子 シャンパンのロゼ。(黒沢たちに)なに？

有樹 聞こえた？

花子 はい。

木俣 ここ生まれ？

有樹 違います。

木俣 名前は本名？

有樹 そうですよ？

黒沢 (ラーラを指し)あの子のおっぱいは本物？

有樹 何すかもう質問攻め！

黒沢 あの子のアレは何で出来てるの？

木俣 黒沢さん。

有樹 ご注文は、

英子 有樹！…叔母ちゃんよ。(じつと見つめる)

有樹 (見返すが)…まだお若いっすよお、

三人 違う。

有樹 え？

黒沢 その反応違うなあ。

有樹 なんすか。

英子 あ、痣は。

木俣 あの左腕見せてもらえませんか？

有樹 腕？

袖をまくって腕を見せる有樹。三人は凝視する。

黒沢 …バラのタトゥー。

木俣 & 英子 (ため息)

黒沢 明菜かよ…。

有樹 …(笑みが消えて)あんたら警察かなんか？

木俣 あ、いや、すいません。

有樹 客じゃないなら帰ってもらえる？

黒沢 まだビールが。

花子がビールとシャンパンを置いていく。

木俣 突然ぶしつけにすいませんでした。実は私たち、ある人を探してまして。

ラーラ いらっしやいませー。

墨助がやってきた。緊張した面持ち。

有樹 社長ー！ご無沙汰じゃないっすかあ！（行こうとするが）

木俣 十年前に行方不明になった男の子なんです。（ビラを渡す）

ラーラ 社長、どーぞ。

ラーラに案内されても墨助は動こうとしない。有樹は木俣にビラを受け取った。

墨助 あの…ラーラ…。

ラーラ ん？

墨助 こないだのことなんだけど…けっ…けっ…。

ラーラ けっけ？

…。

有樹 （ビラを読み）…折出有樹君？

木俣 はい。

有樹 （自分を指し）折出有樹君。

木俣 もしかしたらと思ひまして。

有樹 なるほどねえ、理解しました。そういうことか。

木俣 同姓同名の方ってほんとに少ないんで。

有樹 十年ずつと探されてると。

英子 あ…いえ、一度は諦めたんですけど。最近また。

有樹 あ、最近。それはまた。じゃ大変だ、大人になって変わってるかもしれないですもんね。顔も名前も。

木俣 ええまあ…。

有樹 同じ名前の子が行方不明なんて、胸が痛いなあ。じゃあもういいっすか？（行こうとする）

木俣 良かったらこれ。

有樹 ええ、ええ。何かあったら連絡しますよ。この連絡先に。

木俣 どんな小さな情報でもかまいませんので、

有樹 了解です。

英子 あの、ほんとに、あなたじゃないわよね。

有樹 …残念ながら。

英子 …。

有樹 …。

有樹 （墨助に）お待たせしましたー、どうしたんですか社長、地藏みたいに

固まって。

墨助 あの…ええと、あ、新しいチラシいる？（鞆から取り出そうと）

有樹 いやいや、（カウンターから古いチラシを出して見せ）まだ古いやつもこん

なにあるんで。どうぞ、ラーラが待ってますよ。

墨助 うん…あ…ちよ、ちよつとトイレ。  
有樹 あれ、社長？今日は食べてきますよね？

墨助 墨助はトイレに逃げていく。有樹は墨助を気にして追いかけていく。

黒沢 帰りますか？

英子 …。(有樹の去った方を見ている)

木俣 英子さん。

花子 …彼じゃないですよ。

英子 え、

花子 ここには日本人、いないんで。

英子 …そうなの。

黒沢 …違つたんですよ。

木俣 良かったじゃないですか、聖子さんに無駄足を踏ませなかったと思え

ば。ね。

英子 …。

黒沢 行きましょうか。

木俣 お会計。

花子は会計をしにいく。有樹が戻ってきた。

有樹 あ、お帰りですか。お力になれずすみませんでした。

木俣 ご迷惑おかけしました。

有樹 頑張ってくださいね…でも、僕ならもう、探さないのでおこな。

英子 え？

有樹 仮に生きてたとしても、十年帰ってこないなら、それはたぶん帰りたくな  
いってことですよ。

英子 …そ、そんなのわからないでしょう、子供だったんだから。

有樹 子供だつて親を捨てることはありませんから。

英子 そんな、

有樹 あなた方だつて。一度は捨てたんでしよう、その子のこと。

英子 どういうこと、

有樹 死んだつてことにしてたんでしょ最近まで？

英子 してたつていうか、そうするしかない事情だつてあるでしょう。

有樹 その事情で？生きてたり死んでたりさせられる子供は迷惑じゃないのか  
なあ？

英子 お義妹さんが、この子のお母さんがどんな思いをしたか、

有樹 いやもちろん、わかりませんけどね、いきなりお母さんだつて会いに来

られても、僕だつたら、今更なんだよこのババアつて思っちゃいますけどね

…、

英子 (有樹にシヤンパンをかける)  
ラーラ  
キヤ、  
有樹 …ちよつと。

気まずい沈黙が流れる店内。トイレから墨助が戻ってくる。濡れたベストを脱ぐ有樹。

墨助 ラーラちゃん、僕ね、断られるかもしれないけど…どうしました？

有樹 …。

木俣 …すいません、あの、

有樹 (笑顔に戻り) いやいや、すいません僕こそ変なこと言っちゃって。空気  
読まないっすね僕って。

花子 (ベストを受け取り) 洗ってきます。

有樹 いや、いいよ。 (クリーニングのチラシを近くにいた黒沢に渡し) 後で  
クリーニング代…請求しますから。

木俣 …。

英子は店を飛び出していく。墨助はおそろのおそろ一同の元に近づき、有樹が黒沢に渡したチラシをのぞき込む。

墨助 …あ、良かったら、新しいチラシなんで。

新しいチラシを黒沢に渡す墨助を非難がましく眺める一同。

## #15 戸籍

メイ おかえり。

竹夫のアパート。竹夫は帰ってきて、本を読むメイの元に近づいた。

竹夫 なあ、お前。

メイ 瞬に三万円あげたんだった？喜んでたよあいつ。

竹夫 ああ、

メイ 現金って言うのが色気ないけどね。でもあのくらいの年の子って物もらう  
より嬉しいもんか。(腹を撫でている)

竹夫 お前さ、

メイ ん？

竹夫 …出来たの？

メイ 出来たつて？

竹夫 それ…、

メイ え？

竹夫 お前、出来てるなら正直に言えよ。  
メイ なあに？…あー、瞬のやつも言ってたなそういや、なんかそんなこと。誕  
生日プレゼントつてやつ？  
竹夫 …。  
メイ 便秘便秘。三日続いて張ってた。  
竹夫 ほんとに？  
メイ 何そんなの本気にして。あたしは瞬一人で十分。  
竹夫 じゃあなんなんだよ。プレゼントつて。  
メイ え？もう聞いちゃう？  
竹夫 お前がもったいつけるからみんな余計な想像するんだよ。  
メイ 誕生日までとっておくつもりだったのになあ。  
竹夫 なんなんだよ。  
メイ …戸籍。  
竹夫 え？  
メイ 瞬に戸籍をあげるの。あたしたち、ほんとの親子になるのよ。

## # 16

### 遭遇

病院の前。  
退院の手続きを済ませた聖子とみさをが歩いている。みさをは紙袋とビラを持っている。

聖子 荷物持ちますから。  
みさを 大丈夫ですよ。  
聖子 重い物持ったらアレですよ。お体大事なときなのに。  
みさを そんな重くないですし、  
聖子 ビラやなんか入ってるから。  
みさを そこまでなんで。（辺りを見回し）タクシーまだみたいですね。  
聖子 何から何まで良くしていただいて、二日もお世話になっちゃって。  
みさを いえいえ。  
聖子 先生にもよろしくお伝えください。  
みさを ほんとお一人で帰れます？妹さん方お待ちになってもいいんですよ。  
聖子 いえ。今日はこの件で八王子に行つて、遅くなるかもしれないんで。  
みさを （ため息をついてビラを見て）こんな事情がおありとは。どうして大病院  
に入院されないのか、やっとなかりました。  
聖子 すみません。なるべくこの町を離れたくなくて、今は。  
みさを …覚えてます私も、この事件のこと。  
聖子 そうですか。  
みさを この頃まだ私も実家にいて。この時、父の方にも連絡が来ましたから。  
聖子 うちが救急外来でもないんで、お力になれなかつたですけど。知り合いの  
医者にもまた、父が聞いてみるそうですから。

聖子  
みさを

ありがとうございます。私も何かわかったらご連絡します。  
これ、貼っておきますからね。とにかく、ちゃんと休んで体にご負担かけないように。うちじゃなくても良いんで定期的に病院には通われた方が。

聖子  
みさを

はい。  
無理したら息子さんが帰られたときに抱きしめる体力なくなっちゃいますよ。

聖子

そうか、そうですね。

買い物袋を下げて沖が歩いてきた。

聖子

見つけることがゴールじゃないですよ。

みさを

そうそう、そこから始まると思わないと。(沖に手を上げる)

聖子

あ。

みさを

旦那兼、パシリです。

聖子

こんにちは。

沖

(会釈)

みさを

パンあった？  
お前が言ったのなかったよ。

沖

えー。

みさを

他のやつ買ったから。

沖

見せて。(袋を受け取り中をのぞく)

みさを

今探すなよ。すいません。

沖

お腹がすくんですよ、二人分だから。

聖子

四人分ぐらい食べてますけど。

沖

ふふ、

聖子

うるさいよ。あ、タクシー来ましたよ。

みさを

じゃあ、お世話になりました。

聖子

お大事になさってください。

みさを

ありがとうございます。

聖子

ありがとうございます。

聖子は礼をしてタクシーの方に歩いて行った。沖は院内に戻りかけるが、ふと気になって聖子の背中を見送る。みさをは見送りつつ、買い物袋からパンを取り出した。

沖

もう食べるのかよ。

みさを

だって。(聖子の紙袋を持って)あ、いけない！折出さん待って！

沖

なに、

みさをは持っていた買い物袋とビラを沖に渡し、紙袋を持って追いかける。

みさを  
折出さん折出さん、これ荷物忘れてる！  
沖  
走るなよ、

沖はみさを追いかけてようとして不意にビラに目を落とし、そのまま固まった。  
ジーンと蝉の音が響く。そこへ、あの夜の嵐と濁流する川の轟音が重なる。  
遠くで聖子が札を言っている声が聞こえる。沖はゆつくりと、聖子が去った方に顔を向けた。やがて、みさをがもどってくる。

みさを  
いやあぶなかつた。持って帰るところだった。ひー腰痛い。

沖  
これ…。  
みさを  
ああそう、あの人の息子さんだつて。貼っておいてくれない？その掲示  
板に。

沖  
…。  
みさを  
かわいそうに、ひき逃げなんだつてよ。

沖  
今も…探してるの…？  
みさを  
そうみたい。でもたぶん…亡くなつてると思うけどね。

沖  
…。  
みさを  
かわいそうだけど。(沖から買い物袋をとり)あ、焼きそばパンだ、ラッキ  
ー。ツボ押さえてるう。

みさをはパンを物色しながら院内に帰っていった。沖はしばらくそのまま、動けずに立ち尽くした。

## #17 藁のうえからの子供

再び竹夫のアパート。メイが本を見せて竹夫に説明している。

メイ  
つまりね、私が出生届を出してなかったことにすればいいわけ。昔の亭主に  
D<<されてたり、若くして人知れず生んだりしたときに、ばれないよ  
うに届けを出さない人って実際に結構いるんだつて。だから私も事情が  
あつて届けを出さなかつたことにすれば良いんだよ。

メイ  
メイ、  
竹夫  
普通は産んだ病院に出生証明書がないと届け出せないらしいんだけど、  
家で一人で産んだつて説だつて、なくはないわけじゃない？調べたら  
ね、よその子供を実子として育てる親ってわりにはいるんだよね。  
待つて。

メイ  
竹夫  
いや、養子つて言うのも考えたよ？それは次の案。市役所に問い合わせ  
たらさ、戸籍謄本？(本をめくりながら)あれ、成人してる子供を養  
子に迎える場合、私の方が出せば瞬は出さなくて場合があるみたい  
なのね、本籍とか何とか適当にごまかして、



有樹がラーラと並んで座っている。有樹はどこかのカメラに向かって話し出した。

有樹

幸や不幸は他人が決めることじゃないですよ。でもたいていこんな話をすると不憫だね気の毒だねって言われるんで、あんまり言いたくないんですけど。はい、僕、数年前まで無戸籍でした。どこで生まれたか知りません。物心ついたときから日本にいますけど、片方の親は広東語を喋ってました。ああ、こいつは中国人。最近結婚して、日本の姓になりましたけどね。

ラーラ

谷ロラーラ。

有樹

もう片方の親？知りません。その時々によって五人くらい父親は変わっ  
たし、どの親も、親と思ったことないですから。実際、昔の記憶もほとん  
どないですよね。思い出したくないだけかもしれないけど。

ラーラは椅子を降りるとぶらぶらと有樹の周囲で遊んでいる。

有樹

覚えてるのは何歳の頃かな。当時住んでたどっかのアパートの前で僕、草  
食ってたんですよね。

ラーラ

草？

有樹

うん、その辺に生えてるやつ。母親が：まあ、形式上の？母親が、マク  
ドナルドに行くって言って、そのまま帰ってこなかったんですよ。何日：何  
週間かなあ、考えてみたら近くにマクドナルドなんてないんですけどね。  
そのときはフレオフィッシュが食えるんだと思って、おとなしく待ってま  
したよ。腹が減って草食つてるときも、チキンタツタのほら、中に入ってる  
キヤベツ？あれだと思って食いました。もちろん全く違う味でしたけど  
ね。

ラーラ

（笑う）

有樹

五番目の父親は、親とはいえないけど、それまでの、挨拶代わりに僕の  
肋骨を折ってくような奴とかと比べればましな方でね、いろいろ教えて  
もらいましたよ、身の程の知り方とか、草を食わずにすむ生き方とか。  
その中でも一番ありがたかったのは、親も自分も捨てる方法です。つま  
り、新しい名前を得て、別人になること。

ラーラ

谷ロラーラ。

有樹の周りに文字が流れる。ラーラは這いつくばってその字を眺めた。

「パスポート」「免許証」「給料明細」「健康保険証」「戸籍謄本」「印鑑証明」など。

有樹

自分を形成する物って意外なほど簡単に作れるんですよ？免許証、

保険証、学生証：一流大学の卒業証明書なんかも。ネットで調べてみてください。そういう業者がさくつと出てきますから。全く架空の人物にもなれるし、実在する人物の名前をもらうことだって出来ます。生きてる人でも、死んでる人でもね：そうして生まれ直すんです。

ラーラが立ち上がる。

有樹

リスク？ありますけど、そんなの生きてりや誰だつてあるんじゃないですか？草食って生きるくらいなら、リスク背負って焼肉食いたいでしょ？

ラーラ

極上のおもてなしと高級な肉に心も体もマシッソヨ、本格韓国焼肉アガシですよこそー。

木俣がやってきて、カメラで有樹をとらえる。

有樹

幸や不幸は自分が決めることです。（持っている免許証を読み上げ）折出有樹、二十歳。これが僕です。僕は今が幸せです：あこれ、モザイク入ってる？音声変えてくださいね？

有樹とラーラは歩き去った。

## #19

### 川縁のゴミ

アワヒ川沿いを、木俣と黒沢が歩いている。木俣はカメラを回して川の映像を撮り、黒沢はその後ろで酒瓶を積んだ自転車を引いて歩きながら、何かを思い巡らせている様子。

黒沢

うーん：うーん…。

木俣

（気になるがカメラに戻る）

黒沢

ううーん…、

木俣

なに。

黒沢

あ、音声入っちゃってます？

木俣

いやいいけど。どうしたんすか？

黒沢

いや：ムーランルージュって映画：ありましたよね。

木俣

ありますね。

黒沢

あの女優さん：トムクルーズの嫁だった人、キー…、

木俣

ニコール・キッドマン？

黒沢

それぞれそれぞれ。いつもここまで出て思い出せないんですよ。

木俣

ずっとそれ考えてたんすか？

黒沢

いや、別のことだけど。そういうもやもやしたものがずっと。

木俣

ふうん。

黒沢

何撮ってるんですか。

木俣

川、

黒沢

はい。

木俣

…の、へり。

黒沢

へり？

木俣

ゴミ溜まつてるでしょう。

黒沢

ゴミですか。

木俣

いや、そのなかに時々きらつと光ってるものがあつて、よく見ると誰かの落とし物とか、生活用品とかが埋もれてたりするじゃない？

黒沢

あるある、自転車の車輪とかね。

木俣

そう、どうやってそこに流れたかわからないような家具とか。でもそういうのだけでもとは持ち主がいたわけで、その一つ一つの過去をたどれば、それぞれに膨大な記憶があるのに、縁なんかに集まって泥に埋もれてるんだなあつて。

黒沢

ずっと忘れられたままね。さっきのキ…キー、

木俣

ニコルキッドマン。

黒沢

また忘れた！実際ね、片目見えないところやって歩いてても縁のゴミなんて気づかないから、同じ原理で記憶のどっかが見えてないってことがあると思うんですよね。

黒沢はポケットからクリーニングのビラを出して眺めている。

木俣

なに？

黒沢

いやこないだの、八王子の店でもらったクリーニングのチラシ。これに写ってる人、なんか誰かに似てるって言うか、見たことあるんだよなあ。

木俣

そんなの取っておいたの？

黒沢

だつてあのヤクザみたいな子がほんとに請求してくるかもしれないでしょ？ 法外なクリーニング代を。そんな時に、もらったチラシを取るときやこ

木俣

こにある値段だけ払えばいいじゃないですか。

黒沢

(ため息) 請求されるかなあ。金使えないなあもう。

木俣

車も返しちやっしたしね。

黒沢

うん。

木俣

いつまで続けるんですか？…これ。

黒沢

…区切りがつくまで？

木俣

区切りねえ。

黒沢

区切りつてなんだろうなあ、

黒沢

行き着く先が川のゴミだけじゃね。

木俣

わかってますよ。

黒沢

うーん。どっかで見た気がするんだよなあ。

木俣

あ、今からですか？

遠くから聖子と英子が歩いてくる。二人とも喪服を着ている。

英子 なるべくさつさと帰りますんで。

聖子 英子さん。

木俣 お気をつけて。

二人は言葉少なく歩いて行った。

黒沢 お葬式？

木俣 墓参りだよ、有樹君の。

黒沢 え、

木俣 今日ですよ、事故から十年。

黒沢 あ…！

木俣 別れた旦那さんの方が、体裁だけでもやるべきだつて。それで英子さんは怒つてて。

黒沢 …そつか。

木俣 何もない墓に参るなんてねえ。

黒沢 あれは今日だったか…。(片目を押さえる)

木俣 あなたにとっても忘れられない日ですよね。

木俣は黒沢の肩をたたき、歩いて行く。

黒沢 …あ。(クリーニングのチラシを見て)この男。あ…！木俣さん！

黒沢は何かを思い出し、木俣を追って走って行く。

## #20 誕生日

クリーニング工場。作業場を竹夫が歩いていると、メイが作業員たちを引き連れてやってきた。竹夫を見つけ、手招きする。

メイ タケちゃんタケちゃん、ちよつとこつち来て。

竹夫 え？

メイが竹夫を引き寄せると、作業員の一人がろうそくに火のついたケーキを持ってきた。竹夫にケーキを持たせると、メイの指揮で歌い出す。

メイ セーの、

作業員たち ハッピーバースデートゥーユー、

歌いながら瞬を探す作業員たち。

作業員たち　　ハッピーバスデートウーユー、ハッピーバスデートディア…、

瞬は見つからない。かわりに墨助が歩いてきた。

作業員たち　　（仕切り直し）ハッピーバスデートディア…、

墨助　　（何となく向かいにいた竹夫からケーキを受け取る）

作業員たち　　（最後のフレーズ）ハッピーバスデートウーユー！

墨助　　（ろうそくを吹き消す）

メイ　　違う違う違う、瞬はどこ？

墨助　　もう帰ったよ。

メイ　　え、

墨助　　半休取るって、昼前に。花子ちゃんとデートだって。

メイ　　なんだとー！？

文句を言いながら作業へ戻って行く作業員たち。メイは帰って行く作業員たちに謝っている。

墨助　　（竹夫に）あいつは今夜、決める気だね。嬉しそうにはしゃいじゃってさ、

川に連れてくんだって、

竹夫　　え、

墨助　　ほんとはどこにいくのかねえ。

竹夫　　…。

メイ　　（かけよって小声で）今夜、瞬に言うからね。

墨助からケーキを奪い、二人は歩き去った。竹夫は反対側に去っていった。

## #21　　デート

アワヒ川の橋。

ピクニックバスケットを下げた花子が勢いよく走ってきた。その後ろに瞬が続く。

花子　　ヤッホー！

瞬　　（笑み返すが）…そこ人んちだよ。

花子　　ごめん。気分だけでもと思って。（花子の声に反応した民家の住民に向

かって）あ、すいません。何でもないです。

どこかで犬が吠えている。

花子 川ってこういう川なんだね。  
瞬 どんな川だと思った？  
花子 いや、山の中にあるやつかなあって。住宅街だと思わなくて。  
瞬 ああ。  
花子 だからピクニック仕様で来たんだよ、お弁当まで作っちゃった。  
瞬 ごめん。  
花子 いいけど。(笑い)瞬君てやっぱり変わってる。

ぶらぶらと橋の上を歩く二人。

花子 なんていう川なの？  
瞬 アワヒ川。  
花子 好きな場所なんだ。  
瞬 いや、好きじゃない。  
花子 ええ？  
瞬 でも、時々来る。一人で。  
花子 ……そうなんだ。  
瞬 うん。父ちゃんたちに言わないでね。このこと。  
花子 うん。言わない。  
瞬 ……  
花子 瞬君の、思い出の場所？  
瞬 ……思い出せない場所。  
花子 ん？  
瞬 俺ね、子供の時のこと覚えてないんだ。  
花子 どのくらいの時？  
瞬 十歳くらいまでのこと。  
花子 ……  
瞬 だけど、父ちゃんに一度聞いたことがあって、俺どこで生まれたのって。  
花子 そしたらアワヒ川だって。それで、何年か前に、地図で調べてきてみたんだ。  
瞬 そしたらどうだった？  
花子 なんもわかんない。  
瞬 はは。  
花子 でも、それから時々、頭がわーってなってきたときに来たりする。  
瞬 ……誰か連れてきたの、初めて？  
花子 うん。  
瞬 そうか。  
花子 つまんないとこでごめんね。  
瞬 ううん。じゃあ今日はこの町でピクニックしよ。何か思い出すかもしれないし、覚えてなかったら、今日の思い出にしよう。

瞬 うん。  
花子 行ってみたいところある？  
瞬 …ある、  
花子 そこでお弁当だ。

二人は歩いて行った。

## #22 白状

みさをの実家。沖が洗濯物を抱えて部屋に入ってきた。部屋の奥でみさをが沖に話しかける。(●＝舞台袖奥で発する台詞)

●みさを 全部取り込んだー？  
沖 うん。(服をたたみ始める)  
●みさを 今日さあ、やっぱりやめるわヨガ…：あなたさあ、こないだ予約の時電話してくれたじゃん、  
沖 ああ、キャンセルしておけば良いの？  
●みさを お願いしていい？  
沖 うん。

沖は携帯電話を取り出してかけようとするが、手を止めると、沖は画面を操作してどこかのサイトにアクセスした。みさをが入ってきてても気づかないほど思い詰めた様子で読みふける。

みさを …(しばらく様子を見ているが)ヨガのキャンセル。  
沖 (ビクツとして携帯を消し)あ、  
みさを 何見てたの？  
沖 いや。  
みさを …(不信)貸して。  
沖 なんでもない、  
みさを 貸しなさいよ。(携帯画面を見て)…折出さんのサイト？…ドキュメンタリー撮ってるっていう、  
沖 …あの、  
みさを (安堵して携帯を投げ返し)なんだ！浮気してんのかと思った。  
沖 しねえよ。  
みさを いたたた、ヨッコイショ。  
沖 ……あ、ヨガに電話。

みさをは横で洗濯物をたたみ始める。

みさを  
いいや、自分でするから。それよりお前さん、ちつとこつちで腰をさすって

くれねえだか。朝から腰がだるいんだ。

沖  
ああ。

沖はみさをの腰をさする。

みさを  
あなたも気になる？

沖  
なにが…、

みさを  
そのサイトのやつ。こつちいた頃だもんね。今日で十年なんだってね…。

沖  
…。

みさを  
なにか覚えてる？

沖  
…いや…お前は？

みさを  
…あなたが大変だったこと。

沖  
え…？

みさを  
忙しかったピークでしょ。全然寝れなくて。上司に呼び出されたら夜中

でもすつ飛んでったじゃない？…手止まってるよ。

沖  
ああ…、(撫でる)

みさを  
やだったなあ。今があるのはあの頃のおかげでもさ。

沖  
…。

みさを  
ねえ、昨日お母さんとも話してたんだけどね。このまま、こつちに帰って

沖  
こない？

沖  
え、

みさを  
会計士になれても、軌道に乗るまでは大変でしょ？この子生まれたら

私も仕事出来なくなるし、でもこつちだったらお母さんが手伝ってくれ

沖  
るから。

沖  
俺…。

みさを  
名古屋は好きだけど、考えてみたらもう向こういる理由もないしね。

沖  
(遮り)みさを、

みさを  
ん？

沖  
……俺……俺ね。

みさを  
…やっぱ同居はいや？

沖  
…(首を振り)考えとく。

みさを  
あなたがいいようにして。どこでもついてくから…もういい、ありがと。

沖は手を離し、みさをはたたみ終えた洗濯物を持って立ち上がると、窓の外を眺める。

みさを  
良い天気だね。この後降るとは思えない。

沖  
そうなの？

みさを  
うん、夜、台風くるんだってよ？

沖  
…。

みさを  
（お腹を撫で）今日は君、出てこないでよ。（部屋を出ようとする）

沖  
俺なんだ。

みさを  
え？

沖  
みさをごめん。（そのまま土下座の姿勢になり）ごめん。

みさを  
（慌てて）なにになにに、どうしたの？

沖  
（頭を下げたまま）俺なんだ…。

みさを  
なにが、

沖  
轢いたんだ、

みさを  
え？…何、聞こえない。

沖  
轢いたんだ子供。

みさを  
…何言ってるの？

沖  
轢いたんだ、子供を…。

沖は土下座の姿勢のまま話し始めた。みさをも立ったまま沖の告白を聞く。

### #23 焦燥

クリーニング工場の喫煙所。休憩時間、タバコを吸いに来た竹夫をメイが追いかけてくる。

メイ  
どうしてダメなの？

竹夫  
なにが、

メイ  
戸籍あげるの、（言ってからあたりを気にして）こないだは喜んだじゃん。

竹夫  
別に喜んでねえよ。

メイ  
喜んだじゃん、

竹夫  
もういいよ、

メイ  
なにが？

竹夫  
瞬に電話した？

メイ  
つながらなかった。ねえ、

竹夫  
もう一度かけて、

メイ  
やだよ、遊び行っただけでしょ？

竹夫  
かけるよ、（タバコの火がつかなくてしまう）

メイ  
何イライラしてるのさっきから？

竹夫  
お前なんか聞いてないの？

メイ  
知らないよ。

竹夫  
川のこととか、なんか言ってた？

メイ  
知らないって。何で急に、

竹夫  
行ったことねえじゃん、川なんかあいつ、

どこか別の場所。花子と瞬がピクニックバスケットを開け、弁当を食べている。

メイ え？  
竹夫 連れてったことねえよな。  
メイ 何で急にそんなこと気にするの？ねえ私が聞いているんだよ、いいって言ったりダメって言ったり、どうして、  
竹夫 今はいいつて、  
メイ だつて誕生日に、  
竹夫 今日じゃねえから。  
メイ え？  
竹夫 ……ほんとはいつだか知らないから。  
メイ ……でも、

始業のベルが鳴る。竹夫は行こうとする。

メイ 待つて。  
竹夫 休憩終わりだから、  
メイ でも、でも私、ほんとに真剣に考えてるし、  
竹夫 無理だろそんなのは。  
メイ え？  
竹夫 他人の子自分の子供にするなんて、そんなの無理に決まってるだろ。  
メイ じゃあ誰の子なの？  
竹夫 ……  
メイ ほんとはあの子、誰の子なの？

竹夫は答えず、仕事に戻っていく。メイは苛立った様子で反対側に去った。

## #24 生まれた場所

警察署の前の街道。瞬と花子が街道沿いのへりに腰掛け、サンドイッチを食べている。車が二人の目の前を走り抜ける。花子は排気ガスに咳き込んだ。

瞬 大丈夫？  
花子 うん、ちよつとほこりが。  
瞬 ごめんねこんなところで。  
花子 ううん、大丈夫。あ。

警察署の前を。パトカーがサイレンを鳴らして走り出る音。

花子 (立ち上がり) 覆面パトカーだ。  
瞬 ヤッホーって言っちゃダメだよ。

二人は笑いながら、逃げるように走って行った。

花子 (笑って) ねえ見て。入り口の門にいるおまわりさん、私たちがこんなところで見てるから怪しんでる。  
瞬 確かに怪しいよね。  
花子 出頭しようか悩んでるボニー&クライドみたいに思われてたりして。  
瞬 ああ。  
花子 ふふふ、  
瞬 誰なのそれ？  
花子 …まあいいや。どうして警察署が思い出の場所なの？  
瞬 最初にアワヒ川に来たとき、このへん歩いて見つけたんだ。そういえばここに一度、父ちゃんと来たことあるなって。  
花子 何しに来たの？  
瞬 わかんない。でも俺、わかんないけどあの門のところですごい泣いてさ。父ちゃんに怒られて、俺を置いてこうとしたから、追っかけたんだ。  
花子 わ、ひどい。  
瞬 でもそのあと一緒に喫茶店でパフェ食べた。  
花子 瞬君が悪いことしたお仕置きだったんじゃない。  
瞬 (笑い) そうなのかも。  
花子 それが最初の記憶？  
瞬 うーん、その前もどつかのホテルに泊まったこととか覚えてるけど、なんか、あの時のことは…パフェ食べながら俺、すごいホッとしててさ。ああ、もう怒ってないから一緒に帰れると思って。  
花子 ふうん…。  
瞬 あん時のこと、一番覚えてるんだ。  
花子 …じゃあ、ここは瞬君が生まれた場所だ。  
瞬 え？  
花子 そのとき泣いてたのは、産声だよきつと。  
瞬 …そうだね。  
花子 …あ。瞬君、行った方が良くかも。  
瞬 え？  
花子 おまわりさん、近づいてきた。  
瞬 やべ、  
花子 (片付けながら) 職質されちゃう。  
瞬 逃げよ。  
花子 行きましょクライド。  
瞬 行こうボビー。  
花子 (笑って) ボニーだよ。

夕方、「バー黒沢」の前。木俣と黒沢が待っているところへ、墓参りを終えた聖子と英子が足早に帰ってくる。聖子も英子も疲弊した様子。

黒沢 おかえりなさい。

英子 (駆け寄ろうとする聖子を捕まえ) 走っちゃダメよ、お義妹さん。  
木俣 すいません、急いでもらわなくて良かったのに。

英子 …どうせ早く帰りましたか。それで、なにがわかったって？

木俣 (聖子の具合が悪そうなので) 大丈夫ですか、聖子さん？

聖子 うん、

英子 ちよつと気分が悪いみたいで。

木俣 え、

英子 墓参りの時、うちの親戚がごちゃごちゃ言ったから…、

聖子 平気よ、それで？

木俣 いや、手がかりといえるほどのことかはわかりませんが。

黒沢 言えますよ。これです。

黒沢はポケットからクリーニングのチラシを出して英子に手渡した。

黒沢 こないだ八王子の店でもらったチラシ。そこに写ってる男。

英子 この男が何？

黒沢 来たんです店に。あの事故の直前。

聖子 え、(英子からチラシを受け取って見る)

黒沢 印象深い客だったから覚えてたんです、

木俣 ほら、僕が最初に動画でアップした黒沢さんのインタビュー、あれで話

てた男いたでしょう、

英子 ああ、橋に立ってたっていう？

木俣 そうですそうです、

英子 …でもこれ、すごい若い子じゃない？

黒沢 え？

英子 二十代くらいに見えるけど？

黒沢 ああ、それじゃないです、こつちだ。(もう一枚チラシを取り出して渡す)

英子 は？

黒沢 それは新しいチラシらしくって。こつちの古い方に写ってる男。

英子 …え、それで？

木俣 黒沢さんの話では、この男が帰った直後に事故がおきたってことですか

ら、何か見てるかも、

英子 ああ、

黒沢 遠くにいたって音くらいは聞こえたらうし、

英子 …でも、また勘違いってことない？こんなちっちゃい写真だけじゃ、

黒沢 あれは忘れないですよ。  
英子 でももし違ったらまた…、  
黒沢 だから、今から私、一人で行ってきます。  
英子 え、  
黒沢 万が一勘違いなら申し訳ないし、でも、どうしても確かめたいんです。  
英子 そう言つてガールズ焼き肉行く人だけどね。  
黒沢 今度はほんとですよ、  
英子 (聖子に)ですつて。  
聖子 …。(チラシを凝視している)  
木俣 僕も行きます。  
黒沢 あなたは店番してくださいよ。  
英子 お義妹さん、写真そっちじゃなくて、こつちよ。  
聖子 …黒沢さん、私も連れてってください。  
黒沢 え？  
聖子 八王子に。  
黒沢 いや…、  
英子 なにもお義妹さんが行かなくて良いわよ、まだその人かどうかもわからないんだし、  
黒沢 そうですよ。いやその人ですけれど。  
木俣 とりあえず確かめに行くだけですから、  
聖子 行きたいの、  
英子 昼間あんなに疲れたでしょう？  
聖子 英子さんは休んでて。  
英子 お義妹さん、  
聖子 すぐ出ましょう、夜になる前に。  
英子 見つからないわよ。  
聖子 え？  
英子 …もう無理よお義妹さん。誰も読まないピラまいて。何かあるたび出かけていって、違つて傷ついて…、  
黒沢 でも、  
英子 この人が何知つてるの？知つてたら名乗り出てるはずじゃない。行つたつても何も出ないわよ。  
木俣 英子さん、  
英子 今日何て言われたかわかつてる？お義妹さんは亡霊に取り憑かれてるつて。兄にも怒られた、お前まで一緒に何やってるんだつて。倒れたのに入院もさせずに、  
聖子 あれは熱射病、  
英子 熱射病じゃない！癌なの！  
聖子 …。  
英子 …もうやめよう？…果てがない。

聖子 ……黒沢さん、お願いします。

聖子は来た道に戻っていく。黒沢は英子を気にしつつも追いかけて、英子はバーへ入っていった。木俣は迷うが、英子と一緒にバーへ戻っていく。

## #26 審判

西日が差す部屋。

土下座のままの沖と、洗濯物を抱いたまま、いつのまにか座って話を聞いているみさを。

沖 ……ほんとにすまない…。

みさを

沖 ……（顔を上げ）みさを。

みさを ……どうして、

沖 ……ほんとに暗くて見えなかった。ほんとに車から降りて探したんだよ、

みさを ……ちがう。

沖 ……ほんとに疲れてて、あの頃…、

みさを ……そうじゃなくて、

沖 ……ずっと話そうと思ってた、お前に言わなきゃってずっと、

みさを ……そうじゃなくて、どうして？……どうして話したの？

沖 ……え…。

みさを ……どうして今？……どうしてこのまま……どうして黙っててくれなかったの

沖 ……？

みさを ……私…知らなければ幸せだったのに。

沖 ……みさを、

みさを ……これは、あなたが。あなたが楽になりたかっただけよ？

沖 ……裏切っていたくなくて…。

みさを ……裏切り…？

沖 ……。

みさをは洗濯物を持ってゆっくり立ち上がり、部屋を立ち去ろうとした。

沖 ……みさを、

みさを ……あなたが私にした、一番の裏切りは…私にこの話をしたことだよ。

みさをは部屋を出て行った。いつの間にか辺りが暗くなり、雨が降り始めた。沖は窓の外を見つめた。

## #27 雨

雨音が徐々に強まり、稲光が光るなか、ずぶ濡れの花子が、上着を雨よけ代わりに頭にかぶせて走ってくる。  
雷が鳴るたびに小さく悲鳴を上げるが、時々わざと顔を上げて雨に濡らしてみたりと、楽しそうな様子。同じくピクニックバスケットを頭の上に掲げた瞬が走ってくる。

瞬　花ちゃん。(振り向かないので)花ちゃん。

花子は振り返るが、笑顔のまま黙っている。雨の中、互いを見て何となく笑い合う二人。

瞬　どこ行くの？

花子　ええ？

瞬　今度はどこ行くの？

花子は答えず、走って行く。瞬が追いかけると、花子は遊ぶようにはしゃいで逃げた。

## #28　確信なき核心

クリーニング工場。作業場の奥に、仕事中の墨助とメイの姿。

黒沢と聖子がやってきて、黒沢は近くにいた作業員に何か言付けると、入口で待っている聖子の元へ戻ってきた。

黒沢　行きましょうか。

聖子　…。

黒沢　…とりあえず、僕が聞いてみますから、そこで待っていてください。

聖子　(頷く)

墨助が作業員に促されて黒沢の元へやってくる。

墨助　いらつしやいませ。なにか？

黒沢　社長さんでしょうか。

墨助　はい。(鋭く)クレームですか。

黒沢　いえ違います。

墨助　(笑顔)すいません、こっちは作業場なんで、お客様でしたら表側のお店の方に。

黒沢　いえ、ちょっと伺いたいことがあります。

墨助　はあ。

黒沢は持っていた三枚のチラシ(クリーニングのチラシと「行方不明」のビラ)から、二種類のクリーニングのチラシを取り出すと、見比べ、「古いチラシ」の方を掲げた。

黒沢　こちらの…こちらの男性について、お話し伺えないでしょうか。  
墨助　…どちら様ですか？  
黒沢　あ、私、こういう者です。

ズボンから黒い手帳を出してチラッと開いて見せる黒沢。墨助は開いた手帳をのぞき込もうとするが、黒沢は見せないようにすぐしましう。

墨助　え、  
黒沢　はい。  
墨助　どちらさま？  
黒沢　警察です。  
墨助　あなた焼肉屋にいた人じゃ？  
黒沢　あ。  
墨助　そうですね？  
黒沢　…よく覚えてらっしゃる。  
墨助　いやまあ。  
黒沢　あの店にはよく？  
墨助　ええ、もう行かないと思いますけど。  
黒沢　なぜですか。  
墨助　まあ…：寂しい思い出が詰まってるというか。  
黒沢　ほう、それはなにゆえ？（メモろうとする）  
墨助　話せば長いんですが…あれ？何を聞きに来たんです？  
黒沢　あ。失礼。こちらの男性なんです、従業員の方ですよ。  
墨助　竹さんですか。  
黒沢　竹さん。フルネームは？

話が聞こえてきたメイは、少し離れたところで様子をうかがっている。

墨助　吉川…あのう、  
黒沢　（「古いチラシ」を掲げ）こちら、（もう片方の手で「新しいチラシ」を見せ）こちらよりも古いチラシだとのことでしたが、まだこの方は働いていらつしゃいます？もしいらつしゃったら、お会いしたいんですが。  
墨助　…先にご用件を。  
黒沢　十年前にですね、アワヒ町という地区で、車による子供のひき逃げ事件があつたんです。  
墨助　え、  
黒沢　あちらが被害者のお母様の、折出さんです。  
墨助　（聖子の方を見る）  
聖子　（頭を下げる）

黒沢 今のところ、犯人はまだ見つかってないんですが、もしかするとその吉川、  
タケさんじゃありませんよ、  
いや、  
タケさん免許持ってませんから。  
いや、そうではなくてですね。事故に遭ったお子さんは亡くなったことになってるんですが、遺体がまだ…、

終業のベルがけたたましく鳴る。作業員たちは戻っていく。

黒沢 なんですか。

墨助 終業の合図です。あの、もういいですか。

黒沢 あの、こちらをご覧くださいいただけますか。「行方不明」のビラを墨助に渡す（こちらが行方不明の、

とにかくタケさんじゃありませんから。

墨助 どうしたの？

メイ いや。

墨助 もう少しお話だけ。

黒沢 やめました。

墨助 え、

黒沢 その人、もういないんで。すいません。

メイ なに？

墨助 お前は良いから。（かつこよく）刑事さん。竹さんは警察にかかるような人ではありません。

黒沢 いや、誤解されてるようですが、

墨助 なにが誤解。

黒沢 …えーとまず、私が刑事じゃないってこととお、

墨助 じゃ何見せたんださつき。

黒沢 あの、彼が犯人だと思ってるわけじゃなくてすね。

墨助 はあ？

黒沢 だから、

作業員 お疲れ様です。

黒沢 あ。

黒沢の視線の先に、帰り支度をした竹夫がやってきた。急いで帰ろうとする竹夫を、メイが引き留めようとしている。

メイ 待って。

竹夫 瞬のやつ探してくる。

メイ 今出ない方が。

黒沢　あなた！ほら、やっぱりそうだ。  
竹夫　え。

黒沢　十年前、私のバーに来ましたよね。そうですね？はは、やっぱり、聖子さんやっぱりこの人ですよ、間違いない。どうしてやめたなんて言ったんですか。

墨助　いや…今日クビにしてやったんです。おい、まだいたのか君は。

竹夫　あ…、

黒沢　あの時、あなたが帰った後に、ひき逃げがあつたでしょう。覚えてらっしゃいますか。

竹夫　…。

黒沢　そのときに行方不明になった折出有樹君、お母様が、彼の行方を捜してるんです。

竹夫　…。(聖子を見る)

黒沢　僕とあなたがたぶん、最後の目撃者なんです。

竹夫　…バーって、どこのバーですかね。

黒沢　え、だから…、

竹夫　俺、バーには行かないからなあ。(行こうとする)

黒沢　あれ？

墨助　ほら、やめた人間はさっさと帰れ。シツシツ、ゴキブリめ、

メイ　そんなにしなくても。

聖子　あの。

聖子が近づいて黒沢から「新しいチラシ」を奪うと、墨助に近づいた。

聖子　では、この方はどうですか。こっちのチラシに写ってる若い男性。

墨助　え？

聖子　この人はまだ働いてますか。

墨助　何か関係が？

聖子　これ見てください。(墨助が持っていた「行方不明」のビラを取り、改めて墨助の前に掲げる)この子供。ここに写ってる子に、似ていませんか。

墨助　…あの、

聖子　息子なんです。生きてれば二十歳になります。

墨助　これ…。(メイと顔を見合わせる)

竹夫は立ち止まり話を聞いていたが、立ち去ろうとする。

聖子　この子。あなたの息子さんじゃないですか？父一人子一人、そういうことになつてませんか？

竹夫　…はい？

聖子　馬鹿な考えもしれないけど、聞いてください。当時、警察の方に聞いた

ことがあるんです。同じ日、うちの子と同じ年頃の親子連れを病院で見た人がいるって。父親が違う名前を名乗っていたし、子供も警戒している様子はなかったから違うだろうって。でも…この二枚のチラシを見て、思ったんです。

英子さん？

…。

もしかしてあなたは、あの嵐の夜、事故に遭ったあの子を助けたんじゃないですか？そして…そのまま連れ去ったんじゃないですか？

聖子 竹夫 …。  
あの子は…事故より前の記憶をなくしてるんじゃないですか？

聖子は竹夫にゆっくり近づくと、腕をとり、そしてすがりついた。

聖子 お願いします。もしうちの子なら、返してください。お願いします。

墨助 竹さん、

聖子 お願いします！お願いします！

長い沈黙。竹夫と聖子は見つめ合っている。

竹夫 (聖子の顔を見つめているが)……何言っただあんだ。

聖子 …。

竹夫 あいつは…俺の息子だよ。

聖子 ……お願い…、

竹夫 (乱暴に聖子を払いのけ)おかしな妄想もたいがいにしてください。バーなんて行ってないし、そんな事故知りません。

黒沢 え…、

竹夫 その行方不明の子供が、うちのやつと似てるとも思いません。でも、

竹夫 それに。母親だっているんですから。

聖子 え…。

竹夫 あいつです。父一人子一人なんかじゃないですよ。

聖子 ……そうなんですか？

メイ ……はい。瞬は私が、お腹痛めて産んだ子です。

墨助 (メイを見る)…。

メイ お産の時は大変でした、まだ十代だったんで。ね、お兄ちゃん。

墨助 ……(戸惑いつつも、頷く)。

黒沢 あ…。

メイ だから、人違いですよ。

聖子 …。

メイ もしお疑いでしたら、戸籍謄本でも取り寄せしましょうか？

黒沢

いいですか？

聖子

いえ……ごめんなさいおかしなこと言つて。私の勘違いだったみたいです。すいません、私は確信したつもりだったんですけど……。

黒沢

ううん。私がいけないの。考えてると、どこまでも妄想が広がって……私の勝手な願望が皆さんを振り回してるんだわ……英子さんの言うとおりに、これじゃ……、

黒沢

聖子さん、

聖子

果てがない……。

聖子は、よろよろと出口へ向かうと、竹夫たちに向かって頭を下げた。

聖子

本当に失礼いたしました……。

聖子は帰っていく。黒沢は釈然としないまま、しかし墨助たちに会釈をし、聖子を追っていった。震えて立ち尽くすメイ、身を固くして動かない竹夫。

墨助

竹さん……あんた、どういうことなの。

竹夫

……。

墨助

もしあの人たちの言つてたとおりなら、あんた……大変だよ。

メイ

お兄ちゃん。

墨助

だとしても……うちの妹巻き込まないでくれよ。

竹夫

……。

墨助は憤った様子で去っていった。メイは俯く竹夫に近づく。

竹夫

……ごめん……。

メイ

……瞬、探しに行こう。

メイは竹夫の手を取り、二人は歩き去る。

## #29

### 被害者の叔母・清水英子の証言

暗闇に、英子の姿が浮かび上がる。向かいには木俣のカメラ。

英子はカメラに向かって、話し始める。

英子

清水英子。折出有樹の叔母で、看護師をしております。年齢はごめんなさい。主人は医師で、中学一年の息子がおります。趣味はテニス、昔から松岡修造さんが好きです。日課は修造さんのオフィシャルサイト「心の声に聞け」で彼の動画を見ること。好きな彼の名言は「一生懸命生きていると、不思議なことに疲れなない」、

木俣

あの、もう良いですか？

### #30

#### 来訪者

夜。黒沢のバーで店番をしている木俣と英子。英子のインタビューを撮っていた木俣はカメラを消し、バーカウンターのなかへ戻る。

英子

ちよつと、どうして切っちゃうのよ。

木俣

無駄なことしか話さないじゃないですか。

英子

自分のパーソナリティーを伝えないと、肝心な話も出来ないでしょ。

木俣

それだけで容量が埋まっちゃいますよ。

英子

もう一回やらせて。

木俣

もう良いですって。

英子

無駄なこと言わないから。

木俣

テニスの話もしない？

英子

しない。

木俣

ネイルサロンの話も。「タベ見たものすごくリアルだった夢の話」とかもや

英子

めてもらって良いですか。

木俣

しないって。

英子

店番しましょ。

木俣

しないって言うてるのに。

携帯電話が鳴り、木俣はメールをチェックする。心配そうに覗き込む英子。

英子

黒沢さん？

木俣

はい。

英子

どうだったって？

木俣

(首を振る)…。

英子

…ほらね！やっぱりあの人の言うこと信用出来ない。

木俣

聖子さん、シヨックだろうな…。

英子

…私を責める目よね。そうよね。

木俣

違いますよ、

英子

わかってる。ひどい言い方したと思う、私も。

木俣

いいえ。僕も、同じこと思っていましたから。

英子

嘘よ、あなたは果てしなく撮りたいでしょ。

木俣

たしかに、ドキュメンタリー撮るならそのくらいのつもりでいるべきですよ

英子

ね…だけどなんでしょうねえ。聖子さんの体が、フレーム越してもどんど

ん小さくなつてくのがわかるんですよね。

木俣

うん。

英子

それでなんというか…ここに果てはあるなって、思っちゃって…、

木俣

英子 ……（窓の外を見て）風やんだみたい。  
木俣 でもこの雨じゃ客どころか人っ子一人、  
英子 誰か来るわよ？お客さんかしら。  
木俣 （目をこらすか）あれは違うでしょ。妊婦ですよ。  
英子 あれ、あの人…、

通りから、傘を差したみさをが歩いてくる。

英子 病院の方じゃない？お義妹さんが倒れたときの。  
木俣 あれ、ほんとだ。  
英子 こっち来る。  
木俣 妊婦がバーに？  
英子 こんばんは。

英子がバーの戸を開ける。みさをは入らず、立っている。

みさを あ…。  
英子 あの、先日病院で…、  
みさを はい。  
英子 どうもその節は。お入りください、濡れますから。  
みさを …、

みさをは後ろを振り返る。その先から、重い歩調で沖が歩いてきた。  
みさをも沖も、ひどく緊張した様子。

英子 あの…？  
みさを 二人…いいですか？  
英子 ええもちろん、どうぞ。

みさをは沖が来るのを待ってバーに入った。沖は入口の前でためらったが、みさをの視線を受け、顔を伏せて中に入る。

木俣 いらつしやいませ。  
みさを・沖 …。  
英子 （二人の様子が気になるが）改めて先日はありがとうございました。ご挨拶できず、すみません。  
みさを いえ…。  
英子 姉、ですよ？今ちよつと、出かけてまして。  
みさを あ…。  
英子 でも、直に帰ってくると思いますんで、

木俣 どうぞ何か飲まれてください。といっても今、バーの主人も出ちゃってる

んで、

沖 え、(顔を上げる)

木俣 カクテルはお作りできないんですが。

みさを ……何にする？

沖 ……

みさを オレンジジュースありますか。

木俣 はい、

みさを この人はウーロン茶…やっぱりウイスキーを。

沖 (みさをを見る)

木俣 え、

みさを ストレートで。

木俣 銘柄は？

みさを お任せします。

木俣 はい…。

二人の様子が気にかかりつつも酒の用意をする木俣。気まずさに話しかける英子。

英子 歩いてらっしゃったんですか？

みさを はい。あ、主人です。

英子 どうも。お二人とも濡れてますよ、何か拭くものでもね。

みさを いえ、

英子 冷えちゃうでしょう、(触れようとする)

みさを (ビクツと身をよじり)大丈夫です、

英子 (みさをの過敏な態度に思わず手を引込め)あ…、

みさを ……すいません…タオルあるんで。

英子 ああ。

みさをは手提げからタオルを取り出し、自分と沖の濡れている服や髪を拭いた。

みさを その後いかがですか、お義妹さんの体調は。

英子 まあ、なるべく休むようにはしているんですが…、

みさを そうもいかないんでしょうね。

英子 ……そちらは、ご予定は？

みさを もうすぐという感じですよ。

英子 ですよね。

みさを はい、今朝からずっと、お腹に鈍い痛みが。

英子 えそれ、陣痛じゃないですか？

木俣 こんなとこいちゃ。

みさを いえ、まだ前駆陣痛だと思いますから。

木俣 ても、  
みさを 大丈夫です。出産の前に、夫婦二人の最後の晩餐というか、ね。  
英子 そうですか…。  
木俣 どうぞ。

木俣はみさをと沖の前に飲み物を置いた。

みさを 飲んだら？

沖 ……。

みさを 楽になるわよ。

沖 ……。(グラスを取る)

木俣 ……震えてますよ。

みさを ……。(沖の手を取り、震えを押さえる)

木俣 寒いんじゃない。

みさを すいません、やっぱり拭くもの、

英子 ええ、上に取ってきましょうね。

みさを ごめんなさい。

英子は二階に上がっていった。

みさを ……それで。

木俣 はい、

みさを ……あの件はどうなりました？お子さんの…、

木俣 ええ、いろいろ当たってはいるんですが、

みさを 犯人は……見つかったんですか？

木俣 あ、いえ……実のところ、犯人捜しはそんなにしていないんです。

みさを そうなんですか？

木俣 ええ、有樹君を探す方がメインなんです。

みさを そうですか…。

木俣 犯人こそ、野放しにしておいていいわけはないんですけどね。

みさを ええ…。

沖 ……どんな奴なんですかね。

木俣 え？

沖 そいつ……今どんなつもりで生きてるんですかね。(ウイスキーをあおる)

みさを ……。

木俣 どうでしょうね。意外と普通に生きてたりしたら、

沖 そう。普通に生きてるんですよ。普通に息吸って、飯食って、仕事して

遊んで結婚して、もしかしてまた生きる希望なんかも見つかったりして、

木俣 忘れたふりしてのうのうと生きてるんですよ。

木俣 許せないな。

沖 許せないですよね、ほんとにそんなの、許されですよえ！  
みさを あなた、

沖 一生怯えて、後悔して、息吸うのも申し訳ないと思って生きるべきですよね、でもね。そいつはわかっているはずなんです。今は普通でも、あとあと必ずそのときが来るって。必ず……。

みさを ……。  
木俣 ……そうか…ですよね。(笑い)あの、大丈夫ですか？

沖 ……僕、  
みさを 行こう。帰ります。

木俣 え？  
みさを すいません、お勘定良いですか。

沖 ……？  
木俣 でもまだ、  
みさを やっぱりお腹が。ほんとに陣痛かも。

木俣 ああ、じゃあじゃあ。英子さん、  
みさを あなた行こう。

沖 ……。  
みさを いいから……ね。

みさをと沖は立ち上がった。

みさを お代は、

木俣 いいですよ、どうぞ急いでお帰りになってください、  
みさを すいません。

木俣 タクシー呼びますか？  
みさを 大丈夫です。

木俣 でも、  
みさを ほんとに。

英子がタオルを持って戻ってきた。

英子 帰るんですか？

木俣 お腹痛いって、

英子 ああ。  
みさを それじゃ。  
木俣 おやすみなさい。

英子 お大事に。

慌ただしく客人を見送り、顔を見合わせて肩をすくめる木俣と英子。  
沖は傘を差してみさをの体を支えながら帰っていく。

そこへ、バーへ帰ってきた黒沢と聖子が通り過ぎる。辺りは暗く、聖子は傘を深く差して俯いているのでみさをに気づかない。みさをもまた傘で視線が遮られ、聖子に気づかない。すれ違いざま稲光が光り、黒沢と沖は思わず傘を上げて空を見上げた。瞬間、制止する二人。閃光のなかで、黒沢は沖の顔を見る。しかし、沖は黒沢に気づかぬまま、傘を伏せて帰って行く。黒沢は何かを思い出したようにしばらく沖の後ろ姿を見つめているが、やがて思い違いという風に首を振ると、聖子と共にバーに戻っていった。

### #31

### リスク

アガシにやってきた竹夫。だが、店内は薄暗く、中には有樹とラーラののみ。

有樹はゴミ袋とほうきを持って床に散らばったガラスの破片を拾い、ラーラは顔を覆って泣いている。二人とも憔悴した様子。

竹夫が入ってくると、有樹は警戒した様子で体をこわばらせ、ラーラは有樹の後ろに隠れた。

竹夫 (二人の空気に圧倒され) ……すみません。

有樹 誰？

竹夫 山田花子さんはいますか。

有樹 なんで。

竹夫 あの…、

ラーラ 誰？《誰？》

竹夫 花子さんとうちの…息子が友達なんです。

有樹 え？

竹夫 瞬って、

メイが遅れて入ってきた。

メイ いた？(室内の異様な雰囲気)え…？

有樹 ああ…あんたクリーニング屋の？

竹夫 はい。

ラーラ 誰？谷口的朋友？《誰？谷口の仲間？》  
(ラーラに)客だよ。すみませんが、見ての通り今日はもう閉店なんですよ。

竹夫 いや、花子さんは。

有樹 だから見ての通り、いません。

竹夫 うちのやつと一緒にありませんか？

有樹 知りませんよ。オフなんで。

メイ ……何かあったんですか？

有樹 ……いやちよつとね。ああ、あんまこつちこない方が良いですよ、ガラス踏む

んで。

メイ …え？あなたどうかしたの？

ラーラ (顔を隠すように覆ったまま後じさる)

有樹 何でもありません。

メイ えちよつと、ちよつと見せて。何もしないから。

有樹 放つといってくださいよ。

メイは怯えさせないよう慎重にラーラに近づくと、チョゴリの袖で覆っていたラーラの両手を外し、顔を見た。ラーラの顔は傷だらけで顔が腫れ上がっている。

メイ これ…どうしたの。

ラーラ ウ…、(涙ぐんでいる)

メイ これ、(竹夫を見る)

竹夫 あんた…、

有樹 僕じゃないつすよ、冗談じゃない。やったのはこいつの旦那ですよ。

メイ え、

ラーラ 谷口！谷口！

有樹 仲間引き連れて飲みに来て。ちんぴら同士酔っぱらってモメて。人の店

竹夫 までグチャグチャにして、たち悪いですよね。

有樹 どうしてこの子が？(有樹が答えないので)ねえ。

ラーラ 笑ってるのが気に入らなかつたんだつて。

メイ (メイに泣きすがる)

有樹 女の子の顔…、

メイ やばい奴に引つかかったんです。運が悪かったんですよ。

有樹 運つて。

メイ 珍しい話じゃないですか。

有樹 警察にいった？

有樹 (小さく笑い)言うわけないでしょう。

メイ どうして、ダメだよ言わなきゃ…、(竹夫を見て、黙る)

竹夫 ……。

メイ …薬局行ってくる。

竹夫 メイ、

有樹 いいつすよ。

メイ そのくらいは。(ラーラに)お薬、買ってくるからね。

ラーラ (うなずく)

有樹 なんであんたが、

メイ …見ちゃったから。

メイは出て行った。メイがいなくなったので、ラーラは有樹にしがみついた。掃除しながら有樹はラーラの頭をぼんぼんと軽くたたいた。



瞬 花子 これ誰の？  
瞬 花子 着てた奴、乾燥機かけてるから。  
瞬 花子 うちの店ならすぐ乾いたよ。  
瞬 花子 せっかく休みだったのに仕事場行くの？  
瞬 花子 あ、ううん。  
瞬 花子 お布団もう一個そっちにあるから。  
瞬 花子 …。  
瞬 花子 …ひとつでもいいよ？  
瞬 花子 あ。(あわてて首を振り)ふとん二つあるんだなと思って。  
瞬 花子 どこの家にも二組くらいあるよ。  
瞬 花子 歯ブラシも？  
瞬 花子 ん？  
瞬 花子 スリッパも…、  
瞬 花子 …。(笑い)瞬君、意外とちゃんと見てるね。  
瞬 花子 …。  
瞬 花子 ラーラのこと知ってるでしょ。私も同じなの。  
瞬 花子 同じ？  
瞬 花子 私も結婚してるんだよ。  
瞬 花子 え…、  
瞬 花子 こっちに来てすぐ籍入れたんだ。でも大丈夫。旦那さんは月に一度く  
瞬 花子 らいしか来ないから。今夜はいないよ。  
瞬 花子 …。  
瞬 花子 帰りたくなつた？  
瞬 花子 ううん。  
瞬 花子 スリッパとか歯ブラシとかペアのマグカップとかはね、私たち一緒に暮らし  
瞬 花子 てますっていう証拠なんだ。時々ほんとかなくて見に来る人がいて、そう  
瞬 花子 いう人に嘘つくためのね。  
瞬 花子 嘘なの。  
瞬 花子 そりやそうだよ。だつて会って二回で結婚したんだから、20も年上のお  
瞬 花子 じさんと。でもいい人でね、会うときは食事につれてってくれるよ。結婚  
瞬 花子 相手というより、どちらかというとお父さん。  
瞬 花子 お父さん。  
瞬 花子 うん。私に名前をくれた人。  
瞬 花子 …。  
瞬 花子 …瞬君が今日、生まれた場所につれてってくれたから、私も言おうと思  
瞬 花子 つたんだよ。  
瞬 花子 うん。  
瞬 花子 誰にも言わないこと。  
瞬 花子 俺も。  
瞬 花子 楽しかったね、今日。

瞬 ……あ、ふとん。(立ち上がる)

花子 (腕をつかむ)いつこでいいよ。

瞬 ……。(押し倒す)

花子 (倒れるが)あ、おうちに電話した？

瞬 (すぐに起き上がり)あ、うん、今さつき。

花子 怒られた？

瞬 ううん。泊まっていたって。

花子 そんなこと聞いたの？

瞬 うん、でもなんか母ちゃん、泣いてた。

花子 うそ！

瞬 ははは。

花子 はははじゃないよ、心配したんだよ？あんなに着信残して。

瞬 携帯見る習慣なかったから。

花子 携帯持つの初めてだし。

瞬 うん。

花子 外泊も初めてだし。そういうの箱入り息子って言うんだよ。

瞬 ふーん。

花子 ああ、瞬君そういう日本語知らないか。

瞬 中国人のくせに。

花子 うるさい。(枕でたたき倒す)

瞬 (倒れたまま)……なんか…家離れちゃいけない気がして。

花子 ん？

瞬 なんか…父ちゃんのそばにいなきゃと思って。

仰向けになっっている瞬の横に、花子も横たわる。

花子 ……だけど、もう大人だよ。

瞬 うん。そうだよ。

花子 学生の時とかは？合宿とか。

瞬 学校行ってない。

花子 ……ははは、

瞬 ははははは、

笑い合う二人。

花子 ……雨、やんだね。

二人は寝転がったまま、窓の外を見た。

深夜。台風が去って雨が上がり、ゆつくりと雲が流れる月夜。

アワヒ町の川辺を、聖子が一人、歩いている。

しばらくして、木俣が追いかけてきた。歩く聖子の背中を、カメラで捉える。

聖子は振り返るが、互いに言葉を交わすことなく、歩いていく。

木俣は途中で立ち止まるとカメラを撮るのをやめ、聖子について行った。

一方、八王子。

アガシからの帰り道、有樹にしがみつくようにして、顔にガーゼを貼ったラーラが歩いている。少し離れた後を竹夫が、さらにその後ろをメイが歩いている。

途中で有樹たちは振り返ると、後ろにいた二人に小さく頭を下げ、帰って行った。

竹夫は振り返ってメイに何か言うのと、メイはうなずいて竹夫を追い越し、一人で帰って行った。

竹夫は立ち止まると軽く空を仰ぐが、やがて視線を落とし、深いため息をついた。暗転。

### #34 守るもの

病院、新生児室の前。ガラス窓越しに沖が赤ん坊を見つめている。

沖 (小さく) おーい。

沖は赤ん坊の反応にほほえみ、赤ん坊の動きに合わせて手を振ったり、窓をたたいたりしている。その様子を、出産後のみさをが入院着のままやってきて見つめている。

みさを ガラス叩かないでください。

沖 (慌てて手を離し) あ、すいませ…、

みさを 赤ちゃんがびつくりしますよ。

沖 なんだ。

みさを 来てたんだ。

沖 もう歩いているの？

みさを うん。(ガラスの中を指し) 顔見に来た。明日からママの部屋につれてって良いんだって。

沖 まだあんまり動かない方がいいんじゃないか。

みさを もう全然平気よ、なにせスーパー安産なので。

沖 先生が初産とは思えないって言ってたよ。

みさを 助産婦さんたちがワー早い早いつて手たたく音が聞こえた。

沖 ほんとに早かった。

みさを …ふふ、まさかほんとに陣痛だったとはね。

沖 (笑って) ほんと。

みさを  
沖 …ごめん。  
みさを …ありがとうね、立ち会ってくれて。  
沖 (首を振り)俺も、ありがとう。  
みさを あなたに抱っこしてもらえてよかった。  
沖 俺も。抱いたとき、すごいやわらかくて、  
みさを (遮って)言わないから。  
沖 え、  
みさを あのこと誰にも。  
沖 …。  
みさを あなたも。誰にも言わなくて良い。  
沖 …でも、  
みさを 言わせようと思ったよ、バーに行ったときは。  
沖 …。  
みさを だけど…この子のためにも、言えない。  
沖 ……ほんとにごめ、  
みさを そのかわり…二度と。この子を、抱かせない。  
沖 …。  
みさを …名古屋に帰って？  
沖 みさを……みさを。

みさをは部屋に戻っていく。沖はみさをに呼びかけたが、みさをは振り返らなかった。

### #35

### 離脱

バーの前の通り。聖子、黒沢、木俣が、英子の見送りに出てきた。英子は旅行鞆を抱きながらハンカチで涙をぬぐっている。

英子 ほんとうに情けない。  
聖子 英子さん。  
英子 ちよつと家あけたくらいで浮気を疑われるなんて。医者のかせになんて脆弱な夫なのかしら、だから未だに自分のクリニックがもてないのよ、そうですよ。  
木俣 まあまあ、  
英子 あなたからも夫に言ってください、汚いバーの二階でせんべい布団に三人  
黒沢 川の字で寝たんですか、  
木俣 車返してからはね。  
聖子 英子さん泣かないで、一度帰るだけじゃない。  
英子 ……そうですよお義妹さん、私すぐに戻ってきますからね。

聖子 うん。

黒沢 そうなんですか？

英子 そらそうですよ。昨日あんなこと言ったくせに、って思うかもしれないけど、お義妹さんが戦ってるのに私だけ一人志半ばで帰還するなんてあり得ませんから。お義妹さんと、果てまで一緒にいたしますから！

黒沢 軍人みたいだな。

英子 絶対有樹君、見つけましょうね。

聖子 ……わかった。

英子 (聖子を固く抱きしめる)

木俣 ……来ましたよ車。

車の音が近づいてくる。木俣はタクシーの方へ手を振って合図した。

英子 木俣さん良いですか、亭主一発殴って息子にPS4買ったらすぐに帰ってきますから、それまでお義妹さんのことちゃんと診てくださいいよ。

木俣 わかりました。

英子 黒沢さん、

黒沢 わかりました。

英子 (びしっと)お布団買ってください。

黒沢 (びしっと)あれじゃないんです。

英子 それじゃお義妹さん、

聖子 気をつけてね英子さん、ほんとに、ほんとに感謝してる。

英子 すぐに帰ってきますからねえ！

黒沢・木俣 ばんざーい、ばんざーい、

黒沢と木俣に万歳三唱で見送られ、英子は帰って行った。

黒沢 ……ほんとにすぐ帰ってくるんでしょうね。

木俣 間違いない。

黒沢 さて、飯でも食ったら作戦会議立てますか、

木俣 作戦会議？

黒沢 これからの。私やつぱり、どうしてもあのクリーニング屋気になるんですよね。

木俣 また行くの？

黒沢 うーん、次は客のふりして店の方から行こうかな。

黒沢は言いながら去っていく。木俣もついて行こうとする。

木俣 最初は僕ら二人だったのに、いつのまにか彼らの方がやる気ですね。

聖子 木俣さん。

木俣 聖子 はい。  
木俣 聖子 私。もうやめようと思います。  
木俣 聖子 ……そう言うのかなと思ってました。  
木俣 聖子 え、  
木俣 聖子 なんとなく。でも英子さんには言えなかったんでしょう？彼女、自分が  
木俣 聖子 きついこと言ったからだって思っちゃいそうだし。  
木俣 聖子 お墓参りで何言われたってやめるつもりはなかったし、体が動く限り続  
木俣 聖子 けるつもりだったんです、でも…、  
木俣 聖子 クリーニング屋の件ですか。  
木俣 聖子 ……昨日、見ず知らずの人に子供を帰せさせて迫ったでしょう。それでわか  
木俣 聖子 ったんです、ああ私、あの子の顔忘れてるって。  
木俣 聖子 でもそれは…。  
木俣 聖子 どんなに変わっても絶対にわかるって思ってたんです。でも…：なにも手  
木俣 聖子 放してないつもりでも、私、気づかないうちに…：離してたんだわ。  
木俣 聖子 聖子さん。  
木俣 聖子 だから私。もうあの子のこと、見つけられない。  
木俣 聖子 ……。  
木俣 聖子 続けられなくてごめんなさい。  
木俣 聖子 ……：僕にとつて、結末はどうでも良かったんです。ただ面白いものがとれ  
木俣 聖子 れば。  
木俣 聖子 (木俣を見る)  
木俣 聖子 ごめんなさい。でもそうなんです。本当は、見つかっても見つからなくて  
木俣 聖子 も、どちらでもよかったです。  
木俣 聖子 ……ええ。  
木俣 聖子 だけど、聖子さんと過ごして、英子さんや黒沢さんたちと頼りない変  
木俣 聖子 なチームができて(笑う)、  
木俣 聖子 (小さく笑う)  
木俣 聖子 みんなで探してるうちに…：いつの間にか、一つの結末だけ望むようになっ  
木俣 聖子 て。何度も、カメラ取り出すのを忘れてて。  
木俣 聖子 ……。  
木俣 聖子 だから、向いてなかったのかもしれないです、ドキュメンタリー。  
木俣 聖子 ……：ありがとうね。  
木俣 聖子 ……：(かっこよく)あなたが決めた場所が、僕のラストシーンで、  
木俣 聖子 (顔を出して)飯食わないんですか。  
木俣 聖子 あ。  
木俣 聖子 あ、あ、いいんです、寒いこと言ってたんで、あの人空気読むな。  
木俣 聖子 ふふ、  
木俣 聖子 ……：送ります、京都まで。  
木俣 聖子 (首を振り)病院に入ります。死に急ぐのは、あの子に失礼ですもん  
木俣 聖子 ね。

木俣

ええ。

二人、歩き出す。

聖子

そうだ、木俣さん、

木俣

はい？

聖子

最後にお願ひしたいことが。

### #36

#### 被害者、犯罪者

竹夫のアパート。大きな鞆を持って竹夫が入ってくる。

瞬

なんなの、ちよつとねえ、

瞬が竹夫を追って入ってきて、竹夫が鞆に瞬の服や生活用品を詰めていくのを止めようとする。その様子をメイがはらはらとみている。

瞬

待ってよ、なんだよこれ、

瞬は袋に入った札束を竹夫につき返すが、竹夫は無視して荷物を詰める。

竹夫

やるって言ってんだよ、

瞬

こんなのいらねえよ、

竹夫

じゃあ置いていけ。

メイ

タケちゃん、

瞬

なんなの？一日外泊したくらいでなんでそんな怒るんだよ、なんでそれ

竹夫

だけで出て行かなきゃいけねえんだよ。

瞬

(服を鞆に詰める)

竹夫

そんなんで怒るのうちだけだよ、俺だつて遊んだりしたいよ、俺もういい

竹夫

大人だよ？

瞬

だから好きだけ遊べつて言ってんだよ、

竹夫

だからつてなんで出てかなきゃいけねえんだよ？

瞬

いい大人だつて自分で言ったろうが。

竹夫

大人になったら追い出すのかよ、こんな金で、

瞬

うるせえなあ…(手を止めて)もういいだろここまで育ててやったんだから。

竹夫

…はあ？

瞬

他人の子供、なんでいつまでも面倒見なきゃなんねえんだよ。

竹夫

タケちゃん！

メイ

…。

瞬

…。

●墨助

ごめんください、竹さん？

瞬

…なんだよそれ、

竹夫

お前もわかってるだろ？昔も一度そういう話したろ？

瞬

…。

●墨助

入るよ。

竹夫

忘れちゃったか？お前ビービー泣いたら、警察署の前で。

瞬

…。

玄関から墨助が入ってきた。

竹夫

あんときや仕方なく連れ帰ったけど、俺もうやだよ。俺が怒ってるのはね。お前が夕べ帰ってこなかったからじゃなくて、お前が帰ってきちゃったからなの。

メイ

ひどいよそんな言い方。

墨助

(メイに)どうした？

メイ

タケちゃんが、瞬を追い出そうとしてる。

墨助

え…。

竹夫

お前だってあの頃と一緒にじゃないだろ？その金が尽きるまで遊んでも良いし、女の家転がり込んだって良いし、

瞬

その後は。その後はどうするんだよ。身分証ひとつないのに一人で生きろって？

竹夫

…警察署に行くんだよ。

瞬

え？

メイ

タケちゃんやめてよ。

竹夫

折出有樹です。十年前に行方不明になりました。そういえば、家族が迎えに来てくれるよ。

瞬

誰、それ。

竹夫

…お前だよ。

瞬

そんな名前知らねえよ。

竹夫

そのうち思い出すよ。

瞬

(笑い)知らない子供拾ってきて、いらなくなったら返すんだ。

竹夫

…。

瞬

…そんな都合良く変わるって…？

竹夫

…変われよ。

瞬

…。

荷物を詰め終わった鞆を投げるように瞬へ突きつける竹夫。瞬はいきり立って鞆を投げ返すと、アパートを出て行こうとする。メイが瞬を追いかける。

メイ

(捕まえて)待つて瞬。父ちゃん本気じゃないから。

竹夫 本気だよ。

メイ 母ちゃんそんなこと思っていないよ。

竹夫 お前は母ちゃんじゃねえだろ！

メイ ……。

瞬 (竹夫を睨む)…。

メイ 待って瞬、瞬！

瞬はアパートを飛び出していった。

墨助 タケちゃん…、

メイ (戻ってきて)ひどいよ、あんな言い方することないじゃない。

竹夫 ごめんな。

メイ わざと怒らせて出て行かせようって？傷つければ、あの子が出て行くと思うの？

竹夫 ……。

メイ それで警察に行く？本当の家族のところに行く？お粗末だよタケちゃん、あの子のことわかってない。

墨助 メイ。

メイ あの子は帰ってくるよ、このうちに。怒っても傷ついても、自分の子じゃないって言われても。だってあの子はわかってもん、わかってここにいたんだもん。突き放したつもりでもそんなの一時だよ。

墨助 それでいいんだよ。

メイ え？

墨助 一時離れていれば。…出て行くのは瞬じゃなく、竹さんなんだよ。

メイ ……どういう意味？

竹夫 ……。

墨助 わかるだろう。出頭するんだよ。

メイ ……タケちゃん？

墨助はメイに近づくと、両手でメイの肩を掴んだ。

墨助 瞬は竹さんの子供じゃない。拾って育てた、よその子だよ。竹さんのしていることは善意であれ、誘拐と同じなんだよ。

メイ 違う、

墨助 昨日来たお母さんは、その被害者なんだよ。

メイ 違う、タケちゃんは助けたの、何も悪いことしてない。それにあの人帰っていったよ。

墨助 だからずっと隠し通せるわけじゃないんだよ。

メイ できる、私が戸籍を、

墨助 そしたらお前も犯罪者になるんだよ。

メイ …だから瞬を追い出したの？そのすきに出て行くために？  
竹夫 ……  
メイ ……でも、私が止めるとは思わなかった…？  
墨助 ……だから俺が来たんだよ。  
メイ え、

墨助はそういつてメイを離さないよう力強く掴んだ。メイは自体を悟り抵抗するが、墨助に捕まれて動けない。

墨助 …じゃあね、竹さん。(メイを連れて行こうとする)

竹夫 うん。

メイ 私だつて母親だよ、瞬はタケちゃんと私の子だよ、昨日そう言ったじゃん、

墨助 メイ、

メイ いやだ！お願いタケちゃん、警察に言わないで、瞬を返さないで！

墨助 仕方ないんだよ、

メイ 二人とも出てくつていうの！？

竹夫 ……ごめんな、メイ。

メイ いやだーっ！

墨助は抵抗して泣き叫ぶメイを抱え、引きずるようにして連れ去った。

### #37 失踪者・吉川竹夫(仮名)の証言

一人残された竹夫は、どこかへ向かつて話し出す。

竹夫 本当に申し訳ないことをしたと思っています。吉川竹夫、本名を、帯広

誠(おびひろ・まこと)といいます。2004年八月三日の出来事と、その後についてお話しします。当時、個人で始めた事業に失敗して多額の借金を抱え、消費者金融に追われていた私は、あの嵐の夜…、

あの夜の雨が竹夫に降り注ぐ。

竹夫 川で入水自殺を図ろうとしたものの実行できず…、

黒沢 おい！なにやってんの！そんなことしちゃダメだよ！

あの夜の黒沢が竹夫に呼びかける。

竹夫

酒の力を借りようと、近くのバーに立ち寄りました。店を出た後、川の縁まで降りていき、願わくば雨で膨らんだアワヒ川が自分を飲み込んで

くれないかと思いつながら川沿いを歩いていると、突然背後で、

急ブレーキと衝撃音。

竹夫 バーンという大きな音がして振り返りました。

竹夫が振り返ると、有樹の影が空を舞っている。

竹夫

遠くで小さいかたまりが空を舞うのが見え、その塊が川に落ちて、やがて自分の方へと流れてくるのが見えました。暗い川の中へ目をこらすと、雨具を着た子供の手が見え：それからはあまり考えもせず、どんどん流されていく子供と併走しながら手を伸ばし、結局は自分も川に入っ  
て子供を岸に引き上げました。意識は失っていたものの、あれだけ大きな衝撃音がしたのに不思議なくらいに目立つ怪我はなく：まるで眠っているように見えました：：：学生時代にプールの監視員をしていた頃のことを思い出して呼吸を確認し、救急車を呼ぼうと携帯電話を探しましたが、川に入ったときに流してしまったようでした。連絡手段を失って途方に暮れかけたそのとき：、

竹夫の頭上で雷鳴が轟く。

竹夫

その時：自分の中である思いが芽生えました。この名前も知らぬ子供のように、自分も消えてしまえたら：：：あの時そう思ったことが、その後のすべてを変えたんだと思います：：：子供を抱えていったん家に連れ帰ると、自分の服を着せ、持てる物だけ持って家を出て、なるべく離れた病院へ連れて行きました。あとあと思えばそれがどんなに危険なことだったかわかっています。でもそのときは、そうしてしまいました。

沖

ああ、あああああ、

あの夜の沖が狂ったように川べりを這い回っている。

竹夫

：子供をはねた車が走り去ったのはわかっていましたから、もしひき逃げならば警察に事情を聞かれるだろうと思いましたが。だから意識が戻る前に消えるつもりで、その場では親子と称し、ほんの一瞬のことだからと、子供を瞬と名付けました。

竹夫の視線の先に、黄色い雨合羽を着た子供時代の有樹が立っている。

竹夫

：ですが結局容態が気になって、意識が戻るまで病院にいました。

有樹は不安げに辺りを見回している。

竹夫

瞬が目を覚まして自分の名前を言えなかったとき、自分の浅はかな行動を後悔しましたが：今更見知らぬ子供だとは言えず、医師が診ている前で、混乱する瞬に向かって自分が父親だと説明しました。

有樹は竹夫に歩み寄ると手を伸ばした。

竹夫

その日から、瞬と私は親子になりました。

竹夫は有樹の手を取った。二人は手をつないで歩き出す。

竹夫

瞬が退院してすぐに、あの嵐の日以来風邪をひいていた私が高熱を出し、しばらくの間、瞬とビジネスホテルを転々として過ごしました。瞬は私が寝込んでいる間もそばから離れようとせず、日が経つほどに自分は息子だと思い込んでいくようでした。

当時のニュースが聞こえてくる。

「被害者は折出有樹君10歳で、現在も行方がわかっておらず、必死の捜索が続いています…」

竹夫

その頃私はもうテレビのニュースで瞬の本当の名前を知っていました。この子を帰さなければいけない、明日には連れて行こう、明日こそは連れて行こう、そう思いながらも、結局瞬を警察に届けることを決意したのは、それから一ヶ月も経った頃のことでした…：…ですがむしろ、本当に返さなければならぬと思ったのは、自分の中に、瞬に対する情が芽生えていることを感じたからでした。

警察署の前へ有樹を連れて行く竹夫。だが、手を離そうとすると有樹は竹夫の腕を掴んで抵抗する。

竹夫

自分の素性を明かさぬまま、警察署の前に置いていくつもりでした。奥にいる警官に自分が折出有樹だと言うよう説明し、手を離そうとすると、瞬は激しく抵抗しました。「お前は俺の子供じゃない！」

有樹を強引に突き放す竹夫。転んでしりもちをついたまま竹夫を見上げる有樹。

竹夫

…そう怒鳴りつけて無理矢理引きはがし、急いでその場を立ち去ろうとすると、瞬は、泣きながら追いかけてきてしがみつきました。

立ち去ろうとする竹夫に追いつがり、全力でしがみつくと有樹。

竹夫 自分が何か悪いことをしたせいだと思っっているのか、しきりに、  
有樹 ごめんなさい！

竹夫 ……ごめんなさいと繰り返してました。必死にすがりつく瞬を見て、私  
は。私は……嬉しかったんです。申し訳ないことをしたと感ずる以上  
に。どうしようもなく。嬉しかったんです。

竹夫は再び有樹の手を取り、連れて歩く。

竹夫 ……その後、一度だけ一人で折出有樹君の家の前まで行きましたが、  
その家は既に引越しているようでした。それ以降、瞬を帰そうとした  
ことはありません。

瞬がやってきて、子供の有樹とすれ違う。瞬と有樹は竹夫から離れていった。  
竹夫は瞬を見送ると、無表情で証言を続ける。

竹夫 本当に申し訳ないことをしたと思っっています。愚かな人間の浅はかな振  
る舞いでたくさんの方を傷つけてきたことを深くお詫びします。折出有  
樹君の人生を奪い、瞬を……私の人生にしたこと。それは決して許される  
ことではなく、これからはその罪を背負い、償っていきたいと思っいます。

竹夫はどこかに向かつて深く頭を下げると、静かに立ち去っついった。

### #38 ラストシーン

木俣 ちゃんとかまつて。

聖子 はい！

アワヒ町の坂道を、自転車に二人乗りをした木俣と聖子が降りてきた。後ろに乗る聖  
子は小さな悲鳴を上げながらも楽しそうにしている。

木俣 いったん止まりますよ。

聖子 おしり痛い、

木俣 はは、そうでしょう。

聖子 でも気持ちいい。

木俣 最後のアワヒ町巡りが自転車ですいません。次はどこに行きます？

聖子 ここからは、一人で。

木俣 え、

聖子 いいですか？川沿いを走っつてきたいんです。

木俣 …大丈夫かなあ、さつき自転車乗れないって。  
聖子 めったにはね。

聖子は一人で自転車に乗り込んだ。慣れない様子でハンドルを握る。

木俣 じゃあ。せつかくなんで撮らせてもらいます。ラストシーンに。  
聖子 やあだ。

自転車をこぎ出す聖子。ぎこちなく左右に揺れながらも、なんとか走り出す。  
木俣は離れた場所で聖子に向かい、カメラを構えた。

木俣 気をつけて。はは、うまいうまい。  
聖子 転びそう、  
木俣 聖子さん。いつてらっしゃい。  
聖子 いつてきまあす、

カメラを構える木俣の姿が遠ざかっていく。

聖子は一人で川縁を走る。

だんだんと周囲の音が消え、川の音だけが大きく響いてくる。

そこは川と聖子だけになる。

聖子は自転車を漕ぎながら少し泣いた。声をあげずに泣いた。

しかしやがて、顔をあげた。

聖子は息を吸い込んだ。そしてひとり、坂道を登っていった。

### #38 痕跡

瞬が歩いている。そこへ花子が走ってきて、瞬と手をつなぐ。

花子 これからどうする？クライド。

瞬 ボニー、どこへでも好きなところへ行こう。

花子 あ、なんかそれっぽい台詞。

瞬 はは。

花子 お母さん、またうちの店に探しに来たってよ。帰らないの？

瞬 帰らないよ。

花子 ふーん。

瞬 あと二日くらいは。

花子 二日。弱気ー。

瞬 でも絶対、向こうが謝るまで許さない。

花子 許さないけど帰るんだ。

瞬 …だって他に、行くところないしさ。

花子 やっぱり、この場所でもない？

瞬 ……ヤッホー！

花子 やだ。また近所の人に見られちゃう。

瞬 ヤッホー！

花子 ヤッホー！

沈黙。川のせせらぎ。遠くで犬が鳴いている。

花子は声を聞きつけて出てきた住人に向かって頭を下げた。

花子 すいませんたびたび。

瞬 ……あいつ、絶対後悔してると思うんだよな。

花子 誰？

瞬 父ちゃん。あんなこと言って悪かったなああって、あとあと。

花子 ……そしたらまた、パフェ食べに行きなよ。

瞬 (笑い)パフェじゃ許さねえよ。

花子 (笑う)そうだそうだ。

花子と瞬は手をつないで再び歩き出そうとするが、ふと、花子が遠くを見て立ち止まった。

花子 (前方を見て笑い)ふ、

瞬 ん？

花子 あの人大丈夫かな。

瞬 誰？

花子 なんかヨロヨロしてる。

向かい側の坂道を、聖子が降りてきた。バランスをкаろうじて保ちながら自転車を走らせているが、瞬たちをよけようとしてブレーキを踏むと、車体がよろめいて倒れそうになった。瞬が慌てて自転車のサドルを掴む。

瞬 大丈夫っすか。

聖子 あ。

聖子は恥ずかしげに頭を下げ、また自転車に乗り直す。

瞬は自転車を離すと花子と歩いて行った。

聖子は再び走り出そうと。ペダルに足をかけた。

だがそのとき、聖子はすべてを見つけたような気がして、振り返った。